

「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばし、 伸ばした臂を曲げるように」

—神變のイメージの變遷を追う—

岩 井 昌 悟

1. はじめに (問題の所在)

原始佛教聖典中に見られる¹ 神變の記述に対する諸學者の立場は様々であるが、信仰の立場から無批判にすべて事實であったと見なすようなものを度外視すれば、大概是それらを釋尊の超人化・神格化に伴い後世に付加された空想的・神話的・奇跡的要素すなわち空想の産物とみる立場か²、またはそれらの記述の中に幾分は事實の痕跡があるとみて合理化して解釋する立場のどちらかであろう³。肯定的な見解もある

¹ ここで「原始佛教聖典」とはパーリのニカーヤと漢譯阿含、南北兩傳の律藏の総體をさす。

² これは中村元氏の立場を筆者なりに租借・要約したものである。中村元『ゴータマブッタI』春秋社、中村元選集〔決定版〕第11巻、1992年、pp.3-14。

「空想的・神話的・奇跡的要素」とされる記述がどれだけの範囲であるかは特定しがたいが、神變の記述はそこに含まれると思われる。

³ いくつか實例をあげれば以下のようなものがある。

D. D. コーサンビー氏は、釋尊が神通力でガンジス河を渡ったという記述を「79歳のときにガンジス河を泳いで渡った」として解釋する。コーサンビー著・山崎利男譯『インド古代史』岩波書店、1966年、p.168。

増谷文雄氏は、目連が釋尊と天眼と天耳で法について談話したことを、「じつと心を澄まして、眼を閉じれば、世尊のお顔がまぶたに浮かび、世尊のお聲が耳の中に聞こえる」ことに解釋する。増谷文雄『増谷文雄著作集6』角川書店、1981年、pp.323-326。

宮元啓一氏は、釋尊がウッタラクルや天界に行ったという記述について、「すばらしい健脚な人ならば一日で往復が可能な」ところに行ってきたことに解釋する。宮本啓一『佛教かく始まりき』春秋社、2005年、p.162。

が⁴、これには上記の見解に対するアンチテーゼとしての性格が認められる。

本論は、上記のいずれの立場にも組せず、原始佛教聖典中に散見される、主に釋尊や佛弟子や神々が行う、特定の定型句を伴う瞬間移動の神變の記述に限定して、それが現實にあり得るか否かの判定を目的とはせず、その神變に関する情報を聖典から収集して整理分類し、表現のヴァリエーションを検討し、神變の記述の實態をとらえ、さらに将来的な展望としてその神變に付隨するイメージの變遷・發展を明らかにすることを目指している。

なぜこのような試みが必要かといえ、神變の記事は後世の付加としてかたづけられ、それを含まか含まぬかで記事の新古の判定基準とされることが多いと思われるが、神變の記事の新古が着目されることは少ないからである。「神變の記述は最初期の記事には含まれない」といった予斷がたとい正鵠を得ていると假定しても、それでは、神變の記述が入り込んだ以降の聖典の發展を跡付けることは全くできなくなってしまう。

本論で取り上げるのは、「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように」という譬喩を伴って表現される瞬間移動の記述である。

2. 定型句「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように」

⁴ 水野弘元氏は、「今日の新興宗教でも、そこにはいかがわしい迷信的要素をもったものもあるかも知れないが、とにかく常人に得られない不思議な靈力が行使される場合が少なくない。釋尊に関する神通奇蹟には、甚だしい誇張や後世の創作も混じているであろうが、それでも佛陀に具わっていた三明六通というような智慧の力はこれを否定することはできない」とする。水野弘元『原始佛教』サーラ叢書4、平樂寺書店、1956年、p.232。

渡邊照宏氏は「自分の常識で理解できることだけを事實として取り上げ、それ以外のものを切り捨てるというのでは宗教文學はわかりません」と述べる。渡邊照宏『新釋尊傳』、ちくま學芸文庫、2005年、p.238。

聖典中には「力ある人」を主語とする定型句による譬喩表現が数多くあるが⁵、その中で佛や佛弟子が行う瞬間移動の記述のほとんどに「あ

⁵ 例えば以下のようなものである。

seyyathā pi bhikkhave balavā puriso dubbalataram purisaṃ sise vā gale vā khandhe vā gahetvā abhiniggaṇheyya abhinippīḷeyya abhisantāpeyya, evam eva

あたかも力ある人が非力の人の頭や首や肩をとらえて、抑え、押さえつけ、碎くように、まさにそのように（齒に齒を置き、舌で顎を押し、心で心を抑え、押さえつる）。MN.020 ‘Vitakkasanthāna-s.’ vol. I, p. 121 など。

seyyathā pi aggivessana balavā puriso tiṇhena sikharena muddhānaṃ abhimantheyya, evam eva

あたかも力ある人が鋭い劍で頭を切り裂くように、まさにそのように（止息禪を行う菩薩の頭をすさまじい風が切りつけた）MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ vol. I, p. 243 など。

seyyathā pi aggivessana balavā puriso daḥhena varattakkaṇḍena sise sisaveṭṭham dadeyya, evam eva

あたかも力ある人が堅固な革紐をもって頭にターバンを巻きつけるように（止息禪を行う菩薩に頭痛が生じた）MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ vol. I, pp. 243-244 など。

seyyathā pi aggivessana dve balavanto purisā dubbalataram purisaṃ nānābhāsu gahetvā aṅgārakāsuyā santāpeyyuṃ samparitāpeyyuṃ, evam eva

あたかも二人の力ある人が非力の人の臂をつかんで、炭穴において焼き、焦がすように、まさにそのように（止息禪を行う菩薩に焦熱が生じた）MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ vol. I, p. 244 など。ただしこの譬喩はヴァリエーションがある。cf. MN.054 ‘Potaliya-s.’ vol. I, p. 365 など。

その他にも MN.035 ‘Cūlasaccaka-s.’ vol. I, pp. 228-229 では釋尊を議論で論破しようとするサッチャカが、釋尊を論破する様を以下の譬喩で表現する。

seyyathā pi nāma balavā puriso dīghalomikaṃ eḷakaṃ lomesu gahetvā ākaḍḍheyya parikaḍḍheyya samparikaḍḍheyya, evam eva

あたかも力ある人が長毛の羊の毛をつかんで引き、押し、引き回すように、まさにそのように。

seyyathā pi nāma balavā soṇḍikākammakāro mahantaṃ soṇḍikākilañjaṃ gambhīre udakarahade pakkhipitvā kaṇṇe gahetvā ākaḍḍheyya parikaḍḍheyya samparikaḍḍheyya, evam eva

あたかも力ある酒作り人が大きなふるいを深い貯水池に入れて、端をもって引き、押し、引き回すように、まさにそのように。

seyyathā pi nāma balavā soṇḍikādhutto vālaṃ kaṇṇe gahetvā odhuneyya niddhuneyya

たかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように、〔そのような短時間の間に〕』という定型句が伴う⁶。

パーリ文では以下の通りである。

so bhikkhu(A) seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam eva brahmaloke(B) antarahito mama purato(C) pātur ahoṣi.

「それから、その比丘は (A)、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるかのように、まさにそのように梵天界において (B)

nipphoṭeyya, evam eva

あたかも力ある酒洒し人が洒し器の端を持って、上にふるい、下にふるい、打ち付けるように、まさにそのように。

また、MN.064 'Mahāmāluṅkya-s.' vol.I, p. 435 に五下分結を断つ行道（四禪）をもって五下分結を断つことを、水の満ちたガンガーを力ある人が腕で渡ることに喩えている。

seyyathāpi ānanda gaṅgā nadī pūrā udakassa samatittikā kākaṭṭhā, atha balavā puriso āgaccheyya: ahaṃ imissā gaṅgāya nadiyā tiriyaṃ bāhāya sotaṃ chetvā sotthinā pāraṃ gacchissāmi ti, so sakkuṇeyya gaṅgāya nadiyā tiriyaṃ bāhāya sotaṃ chetvā sotthinā pāraṃ gantūṃ, evam eva kho....

阿難よ、あたかもガンガー河が満ち、カラスが飲めるほどに水が岸まで一杯で、そこに力ある人が「私はこのガンガー河の流れを、腕で横切り、無事に向こう岸へ行こう」とやって来るとして、彼はガンガー河の流れを腕で横切り、無事に向こう岸に至ることができよう、まさにそのように。

⁶ ただし Vinaya 'Mahākkhandhaka' のウルヴェーラ・カッサバを神通力で降伏する釋尊の記述など、この定型句なしに釋尊や佛弟子が長距離を瞬時に移動する記述もある。

atha kho bhagavā uruvelakassapassa jaṭilassa cetasā cetoparivitakkam aññāya uttarakuruṃ gantvā tato piṇḍapātaṃ āharitvā anotattadahe paribhuñjivā tatth' eva divāvihāraṃ akāsi (pp.27-28)

それから世尊は結髮外道ウルヴェーラ迦葉の心の所念を心で知り、ウッタラクルに行き、そこから鉢食を得て、アノータッタ池で食し、そこで昼の休息をとった」
uruvelakassapaṃ jaṭilaṃ uyyojetvā yāya jambuy' āyam jambudīpo paññāyati, tato phalaṃ gahetvā paṭhamataraṃ āgantvā agyāgāre nisīdi. (p.30)

世尊は結髮外道ウルヴェーラ迦葉を行かせてから、このジャンプ洲の名の由来となったジャンプ樹から實を得て、先んじて歸り、火堂に坐った。

隠れ、私の前に (C) 出現した。」

この定型句のヴァリエーションは上記の下線部 (A) 主語と、下線部 (B) 出発地点、下線部 (C) 到達地点の語を入れ替えることで作られる。

以降、この定型句を「臂の屈伸喩」と呼び、これを伴って記述される神變を「臂の屈伸喩の神變」などと言います。

3. 資料

凡例と略号

- ・パーリ資料については *Dīghanikāya* (DN.)、*Majjhimanikāya* (MN)、*Saṃyuttanikāya* (SN.)、*Aṅguttaranikāya* (AN.)、*Udāna*、*Vinaya* を範囲とする。ただし「4. 分析」以降の論述においてはこの限りではない。
- ・パーリの資料に内容的に対応する漢譯資料はできる限り参照して資料に含める。内容的に対応しているが臂の屈伸喩を伴わないものは脚注に掲げる。梵文資料についても、網羅的ではないが気が付いたものがあれば同様に扱った。
- ・パーリに対応のない漢譯資料については、『中阿含』『雜阿含經』までを資料として挙げ、『增壹阿含經』、諸漢譯律藏のものでパーリに対応のない記事は資料として網羅的に収集することはせず、必要な場合に「4. 分析」以下において用いるにとどめた。『長阿含經』については、パーリに対応を有さない臂の屈伸喩を含む資料が見出されない。
- ・出発点と到達点についてのパーリとその対応經の差異は脚注に明記する。特にパーリ資料については主語や移動の出発点と到達点を引用文中で明示することが困難なケースがあり、そのような場合、その情報は見出しに示すのみか、脚注に記した。引用文中に明示されている場合は下線を付した。
- ・往復が明記されていれば ⇔ で示し、往路のみであれば → で示した。ただしこの点について対応經に違いがあってもそれは明記

せず、パーリ資料にもとづいて示した。

[1] 人が人間界と三十三天とを行き來する。

[1-1] 目連：東園鹿子母講堂⁷ ⇔ 三十三天

MN.037 ‘Cūḷataṇhāsāṅkhaya-s.’ (vol.I p.252) : *atha kho āyasmā mahāmoggallāno seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam eva pubbārāme migāramātu pāsāde antarahito deveesu tāvatimsesu pātur ahoṣi.* (pp. 254-255) *atha kho āyasmā mahāmoggallāno sakkassa devānam indassa bhāsitaṃ abhinanditvā anumoditvā seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam evaṃ deveesu tāvatimsesu antarahito pubbārāme migāramātu pāsāde pātur ahoṣi.*

『雜阿含經』505 (大正 02 p.133b-c) : 時尊者大目犍連。在耆闍崛山中……如力士屈伸 (p.133c) 臂頃。於耆闍崛山沒。至三十三天。去一分陀利池不遠而住。……時尊者大目犍連即沒不現。

『增壹阿含經』019-003 (大正 02 p.594a) : 爾時尊者大目犍連即以神足。如屈伸臂頃。便至三十三天。…… (p.594b) 爾時目犍連具說法已。猶如士夫屈伸臂頃。從三十三天沒不現。便來至舍衛城祇樹給孤獨園。至世尊所。

[1-2] 目連：祇園 → 三十三天⁸

SN.040-010 (vol.IV p.269) : *atha kho āyasmā mahāmoggallāno seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito deveesu tāvatimsesu*

⁷ パーリはこの時の目連の所在を東園鹿子母講堂とするが、『雜阿含經』505は王舍城・耆闍崛山に、『增壹阿含經』019-003は祇園とする。

⁸ ここでは對應經であるかないかにかかわらず、目連が祇園から三十三天に赴いて神々に說法するという形式のものを集める。*SN.055-018*、*SN.055-019*の對應經である『雜阿含經』507 (大正 02 p.134c)は目連の所在を明記しないが「佛住王舍城迦蘭陀竹園」とし、また「時有四天子。來詣尊者大目犍連所」として目連の移動はない。

pātur ahoṣi.

SN.055-018 (vol.V p.366) : atha kho āyasmā mahāmogallāno seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito deveṣu tāvatimsesu pātur ahoṣi.

SN.055-019 (vol.V p.367) : atha kho āyasmā mahāmogallāno seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito deveṣu tāvatimsesu pātur ahoṣi.]

『雜阿含經』506(大正 02 p.134b):尊者大目犍連。知四衆去已。即入三昧。如其正受。如大力士屈伸臂頃。從舍衛國沒。於三十三天賤色虛軟石上去波梨耶多羅拘毘陀羅香樹不遠而現。……(p.134c)尊者大目次連。受世尊教。即入三昧。譬如力屈伸臂頃。從三十三天沒。至閻浮提。

[1-3] 釋尊：祇園 → 三十三天⁹

SN.055-020 (vol.V p.367) : atha kho bhagavā seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya,] evam eva jetavane antarahito deveṣu tāvatimsesu pātur ahoṣi.

[1-4] 釋尊 (ナンダとともに)：祇園 ⇔ 三十三天¹⁰

Udāna 003-002 (p.022) : atha kho bhagavā āyasmantaṃ nandaṃ bāhāyaṃ gahetvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam evaṃ jetavane antarahito deveṣu tāvatimsesu pātur ahoṣi. (p.23) atha kho bhagavā āyasmantaṃ nandaṃ bāhāyaṃ gahetvā seyyathā [pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ] sammiñjeyya, evam evaṃ deveṣu tāvatimsesu antarahito jetavane pātur ahoṣi.

⁹ 對應する『雜阿含經』1135 (大正 02 p.299b) は「爾時有四天子……來詣佛所」とする。

¹⁰ 『增壹阿含經』018-007 では祇園→香山→三十三天→地獄→祇園と移動する。

『增壹阿含經』 018-007 (大正 02 p.591c) : 是時世尊即以神力手執難陀。
猶如力人屈伸臂頃。將難陀至香山上。……爾時世尊如屈伸臂頃。從
彼山不現。便至三十三天。…… (p.592a) 爾時世尊。便作是念。我
今當以火滅難陀火。猶如力人屈伸臂頃。世尊右手執難陀臂。將至地
獄中。爾時。地獄衆生受若干苦惱。爾時。彼地…… (p.592b) 爾時
世尊屈伸臂頃。手執難陀。從地獄不現。便至舍衛城祇樹給孤獨園。

[1-5] 諸仙人：海岸の草庵 ⇔ アスラ王・サンバラの面前¹¹

SN.011-001-010 (vol.I p.227) : atha kho bhikkhave te isayo sīlavanto kalyānadhammā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva samuddatīre pannakutīsu antarahitā sambarassa asurindassa sammukhe pātur ahesum.
..... atha kho bhikkhave te isayo sīlavanto kalyānadhammā sambaram asurindam abhisapetvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva sambarassa asurindassa pamukhe antarahitā samuddatīre pannakutīsu pātur ahesum.

[1-6] コーラヴィヤ王：クル國 ⇔ 三十三天（復路は帝釋天とともに）¹²

『中阿含經』 130 「教曇彌經」 (大正 01 p.619a-b) : 高羅婆王聞已。猶如
力士屈伸臂頃。如是。高羅婆王於拘樓瘦沒。至三十三天。住天帝釋前。
白曰。拘翼。當知善住尼拘類樹王無果。亦不生果。於是。天帝釋及
高羅婆王。猶如力士屈伸臂頃。如是。天帝釋及高羅婆王。於三十三

¹¹ ブッダゴーサはアスラ王サンバラ (asurinda Sambara) を Vepacitti と同一視する (SN-*atthakathā*, vol. I, p. 347)。「ヴェーパチッティ・アスラは三十三天に属」する (tāvatiṃsesu deveṣu vepacittāsurā gatā) とされるので (Sārasaṅgaha, ed. p.213 ; 浪花宣明『サーラサンガハ』平楽寺書店、1998年、p.378)、便宜的にこれを三十三天に分類する。對應經の『雜阿含經』1115 (大正 02 p.294c) と『別譯雜阿含經』044 (大正 02 p.388a) は諸仙人の移動が明記されていない。

¹² 對應經の AN.006-005-054, vol. III, pp. 369-370 は単に「コーラヴィヤ王は帝釋天に近づいた」とする (atha kho rājā koravyo yena sakko devānam indo ten' upasañkamaṃ, upasañkamitvā sakkam devānam indaṃ etad avoca)。

天中沒。至拘樓瘦。去善住尼拘類樹王不遠住。天帝釋作如其像如意足。以如其像如意足。化作大水暴風雨。作大水暴風雨已。

[2] 人が人間界と梵天界とを行き來する

[2-1] ある比丘：梵天界 → 釋尊の面前¹³

DN.011 ‘Kevaddha-s.’ (vol.I p.222) : atha kho so kevaddha bhikkhu seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam eva brahmaloke antarahito mama purato pātur ahoṣi.

『長阿含經』024「堅固經」(大正01 p.102c) : 時比丘於梵天上忽然不現。譬如壯士屈申臂頃。至舍衛國祇樹給孤獨園。來至我所。

[2-2] 釋尊：ウッカッター・スバガ森・サーラ樹王¹⁴ → 梵天界（バカ梵天のところ）

MN.049 ‘BrahmanimantaNika-s.’ (vol.I p.326) : atha khvāham bhikkhave bakassa brahmuno cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya, evam evaṃ ukkatthāyam subhagavane sālārājamūle antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣim.

SN.006-001-004 (vol.I p.142) : atha kho bhagavā bakassa brahmuno cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva

¹³ 釋尊の所在はパーリでは不明。『長阿含經』024は舍衛國祇樹給孤獨園とする。

¹⁴ 釋尊が悪見(常見)を生じたバカ梵天のもとを訪れる記事はパーリにも複数あるが、MN.049では釋尊が祇園にいた時に諸比丘にそれを過去のこととして語り、その時の所在をウッカッターとする。SN.006-001-004の記述では釋尊が祇園にいた時のこととするように讀める。なお *Jātaka* 405 ‘Baka-j.’ vol. III, p. 359 も同様に祇園とする。『中阿含經』078、『別譯雜阿含經』108も祇園とする。なお本文に掲げた資料の他に『雜阿含經』1195(大正02 p.324b)も對應經であるが、「爾時世尊知婆旬梵天心念已。入於三昧。如其正受。於王舍城沒。住梵天上。婆旬梵天遙見世尊而說偈言」として臂の屈伸喩がないため、資料から除く。これは釋尊の所在を「王舍城・迦蘭陀竹園」とする。

jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi.

『中阿含經』078「梵天請佛經」（大正01 p.547a）：於是。世尊以他心智。知彼梵天心之所念。即入如其像定。以如其像定。猶如力士屈申臂頃。於舍衛國勝林給孤獨園。忽沒不現。往梵天上。

『別譯雜阿含經』108（大正02 p.412b-c）：一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。……爾時世尊。知婆迦梵心之所念。如來爾時。譬如壯士屈申臂頃。尋即往彼婆迦梵宮。……爾時世尊。爲婆迦梵。說種種法。示教利喜。尋復於彼沒還祇洹。

[2-3] 釋尊、目連、大迦葉、マハーカッピナ、阿那律：祇園 ⇔ 梵天界¹⁵
SN.006-001-005 (vol.I pp.144-145) : atha kho bhagavā tassa brahmuno cetasā cetoparivittakam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. addasā kho āyasmā mahāmoggallāno disvāna seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam evaṃ jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. addasā kho āyasmā mahākassapo disvāna seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya] evam evaṃ (p.145) jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. addasā kho āyasmā mahākappino disvāna seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya] evam evaṃ jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. addasā kho āyasmā anuruddho disvāna seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā

¹⁵『雜阿含經』1196（大正02 pp.324c-325b）では「爾時。世尊知彼梵天心之所念。即入三昧。如其正受。於舍衛國沒。現梵天宮。當彼梵天頂上」などとしており、釋尊につづいて梵天界に赴くアンニャータ＝コンダンニャ・摩訶迦葉・舍利弗・目連においても同様の記述である。臂の屈伸喩がない。『別譯雜阿含經』109（大正02 p.412c）も同様に「爾時世尊。入於三昧。從閻浮提沒。現於梵頂虛空中坐」などとする。なおここではつづく佛弟子はコンダンニャ・摩訶迦葉・目連・阿那律である。

bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam evaṃ jetavane antarahito] tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. atha kho bhagavā taṃ brahmānaṃ saṃvejetvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ tasmim brahmaloke antarahito jetavane pātur ahoṣi.

[2-4] シキン佛 (アビブー比丘とともに) : 王都アルナヴァティー ⇔ 梵天界¹⁶

SN.006-002-004 (vol.I p.155) : atha kho bhikkhave sikhī bhagavā arahaṃ sammāsambuddho abhibhū ca bhikkhu seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva arunavatiyā rājadhāniyā antarahitā tasmim brahmaloke pātur ahesum. (p.157) atha kho bhikkhave sikhī ca bhagavā arahaṃ sammāsambuddho abhibhū ca bhikkhu brahmānaṃ ca brahmaparisaṇṇa ca brahmapārisajje ca saṃvejetvā seyyathāpi nāma [balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva] tasmim brahmaloke antarahitā arunavatiyā rājadhāniyā pātur ahesum.

[2-5] 目連 : 祇園 ⇔ 梵天界¹⁷

AN.006-004-034 (vol.III pp.332) : atha kho āyasmā mahāmoggallāno, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. (pp.333-334) atha kho āyasmā mahāmoggallāno tissassa brahmuno bhāsitaṃ abhinanditvā anumoditvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito jetavane pātur ahoṣi ti.

¹⁶ 漢譯に對應が見出されない。

¹⁷ 漢譯に對應が見出されない。

[2-6] 目連：耆闍崛山 ⇔ 梵天界¹⁸

AN.007-006-053 (vol.IV p.075) : atha kho āyasmā mahāmoggallāno, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva gijjhakūte pabbate antarahito tasmim brahmaloke pātur ahoṣi. (p.078) atha kho āyasmā mahāmoggallāno tissassa brahmuno bhāsitaṃ abhinanditvā anumoditvā, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito gijjhakūte pabbate pātur ahoṣi.

[3] 人が人間界と淨居天とを行き來する

[3-1] 釋尊：ウツカッター・スバガ林・サーラ樹王の下¹⁹ → アヴィハ（無造）天²⁰

DN.014 'Mahāpadāna-s.' (vol.II p.050) : atha kho aham bhikkhave seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva ukkatthāyaṃ subhagavane sālārājamūle antarahito aviheṣu deveṣu pātur ahoṣim.

*Mahāvādānasūtra*²¹ (pp.158-162) : so 'ham tadyathā balavān puruṣaḥ saṃmiñjitaṃ vā bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ vā saṃmiñjayed evam evāham jambudvīpe 'ntarahito 'brhe devanikāye pratyasthām so 'ham tadyathā balavān puruṣaḥ saṃmiñjitaṃ vā bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ

¹⁸ 漢譯に對應が見出されない。

¹⁹ *Mahāvādānasūtra* はジャンプ州。『長阿含經』001は「羅閱城・耆闍崛山」。『毘婆尸佛經』は「王舍城七葉巖邊」。

²⁰ パーリ、*Mahāvādānasūtra*、『長阿含經』001はみな同様に釋尊が最初に至る天を Avīha (Avrha、無造) 天とするが、『毘婆尸佛經』のみ「善現天」(Sudassā) とする。なお釋尊はこの後、パーリではアタツパ→スタツサ→スタツシン→Sudṛṣā ; Sudassa アカニツタ天に「近づく」(upasaṅkami)。『毘婆尸佛經』においては善現→善見→色究竟天に「往」く次第が示されている。そこでは臂の屈伸喩は用いられない。

²¹ *The Mahāvādānasūtra, A New Edition Based on Manuscripts Discovered in Northern Turkestan*, edited by Takamichi Fukita, Sanskrit Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 10, 2003.

vā sammiñjayed evam evāham abṛhakāyikābhir devatābhiḥ sārddham
atapakāyikābhir devatābhiḥ sārddham sudṛśakāyikābhir devatābhiḥ
sārddham sudarśanakāyikābhir devatābhiḥ sārddham sudarśane devanikāye
'ntarhito 'kanisthe devanikāye pratyasthām.

『長阿含經』001「大本經」(大正 01 p.10b) : 我自思念。昔一時於羅闍
城耆闍崛山……我欲至無造天上。時我如壯士屈伸臂頃。於此間沒現
於彼天。……譬如力士 屈伸臂頃 我以神足 至無造天

『毘婆尸佛經』(大正 01 p.158b-c) 我於一時在王舍城七葉巖邊。……我
於彼時入三摩地。如大力士展臂之間。至善現天。……無上二足尊
而入三摩地 速運大神通 離彼閻浮界 來至善現天 譬如大力士
速展於手臂 剎那到此間

[4] 六欲天の神が天界と人間界とを行き來する。

[4-1] ヴィッサカマ : 三十三天 → マハースダッサナ王の面前²²

DN.017 'Mahāsudassana-s.' (vol.II pp.180-181) : evaṃ bhaddan tavā ti
kho ānanda vissakammo devaputto sakkassa devānam indassa paṭissutvā,
seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya
pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva devesu tāvatimsesu
antarahito rañño mahāsudassanassa purato pātur ahoṣi.

法顯訳『大般涅槃經』(大正 01 p.201c) : 時天帝釋。知王心念。呼一天
子。名毘首建磨……彼天奉勅即便來下。猶如壯士屈伸臂頃。到閻浮
提。當王前立。

[4-2] 帝釋天(パンチャシカを伴う) : 三十三天 → マガダ・王舍城の東・
アンバサンダー婆羅門村・ヴェーディヤ山のふもとの村の北・イ
ンダサーラ窟

DN.021 'Sakkapañha-s.' (vol.II p.264) : atha kho sakko devānam indo
devehi tāvatimsēhi parivuto pañcasikhena gandhabbadevaputtēna
purakkhato, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ

²² 『長阿含經』「遊行經」(大正 01 p.23a) は「時第二剎利妙匠天子默自思念。唯我能
堪與善見王起正法殿。阿難。時妙匠天造法殿」とするのみで、移動の記事がない。

pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ devesu tāvatimsesu antarahito magadhesu, pācīnato rājagahassa ambasandā nāma brāhmanagāmo, tassī uttarato vediyake pabbate paccutthāsi.

『長阿含經』014「釋提桓因門經」(大正01 p.062c)：時釋提桓因。翳利諸天及般遮翼。於法堂上。忽然不現。譬如力士屈伸臂頃。至摩竭國北毘陀山中。

『帝釋所問經』(大正01 p.246b)：爾時帝釋天主。與五髻乾闥婆王子及彼天衆。從彼天沒。譬如力士屈伸臂頃。即到摩伽陀國毘提山側。

『中阿含經』134「釋問經」(大正01 p.633a)：於是天王釋及三十三天五結樂子。猶如力士屈伸臂頃。於三十三天忽沒不現。已住摩竭陀國。王舍城東椽林村北峭陀提山。

[4-3] 帝釋天²³：三十三天 ⇔ ニミ王の面前

MN.083 'Makhādeva-s.' (vol.II p.079) : atha kho ānanda sakko devānam indo seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva devesu tāvatimsesu antarahito nimissa rañño mukhe pātur ahoṣi. atha kho ānanda sakko devānam indo nimissa rañño adhiṅgamaṃ viditvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam eva nimissa rañño mukhe antarahito devesu tāvatimsesu pātur ahoṣi.

『中阿含經』067「大天椽林經」(大正01 p.514b-c)：爾時。帝釋猶如力士屈伸臂頃。於三十三天上忽沒不現。已來至此尼彌王殿。……時。尼彌王爲天帝釋默然而受。於是。帝釋知尼彌王默然受已。猶如力士屈伸臂頃。於尼彌王殿忽沒不現。已還至彼三十三天。

『增壹阿含經』050-004(大正02 p.809b)：窮鼻尼受教便下。如人屈伸臂頃。忽然在王殿前。……天女便還白天帝曰。已達宣命。

²³ 『增壹阿含經』050-004では帝釋天が「窮鼻尼」という天女をニミ(菴)王のもとに遣わし、この天女の移動に臂の屈伸喩が用いられている。なお「窮鼻尼」は「極端正」の意であると割註があるが、原語の特定はできない。

(54)

[4-4] ヴェツサヴァナ大王：マヒサヴァットウ・サンケツヤ山・ダヴァ
ジャーリカー → 三十三天²⁴

帝釋天：三十三天 → マヒサヴァットウ・サンケツヤ山・ダヴァ
ジャーリカー²⁵

AN.008-001-008 (vol.IV p.162) : atha kho vessavaṇo mahārājā seyyathā
pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ
vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva mahisavatthusmiṃ samkheyyake
pabbate dhavajālikāyaṃ antarahito deveṣu tāvatimsesu pātur ahoṣi.
(p.163) atha kho sakko devānaṃ indo seyyathā pi nāma balavā puriso
sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya,
evam eva deveṣu tāvatimsesu antarahito mahisavatthusmiṃ samkheyyake
pabbate dhavajālikāyaṃ āyasmato uttarassa sammukhe pātur ahoṣi.

[4-5] 給孤獨天子（兜率天子）：兜率天 → 祇園の釋尊の面前²⁶

『雜阿含經』 593 (大正 02 p.158b) : 時給孤獨長者疾病命終。生兜率天。
爲兜率天子。……如力士屈申臂頃。於兜率天沒。現於佛前。

[5] 梵天が梵天界と人間界とを行き來する

[5-1] 大梵天：梵天界 → 菩提樹下のヴィパッシン佛の面前²⁷

DN.014 'Mahāpadāna-s.' (vol.II p.37) : atha kho so bhikkhave
mahābrahmā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ

²⁴ これは四大王天が人間界から三十三天へ移動するケースであるが、ここに分類しておく。

²⁵ 漢譯に對應が見出されない。

²⁶ 『別譯雜阿含經』 187 (大正 02 p.441c) は「身壞命終。得生天上。既生天上。尋還佛所。須達天子光色倍常。照于祇洹。悉皆大明」として、SN.002-002-010, vol. I, p. 055 は imaṃ bhikkhave rattiṃ aññataro devaputto abhikkantāya rattiyā abhikkantaṃvaṇṇo kevalakappaṃ jetavanaṃ obhāsetvā yenāhaṃ ten' upasaṅkami とするのみで、兩者ともに臂の屈伸喩を出さない。

²⁷ これはヴィパッシン佛への梵天勸請である。『毘婆尸佛經』 (大正 01 p.156c) の記述は「時毘婆尸佛既成道已。即作是念。我於何處先應說法利益有情」として梵天勸請の件なし。Mahāvadānasūtra の記述 (p.144) も梵天勸請の件を含まない。

pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam eva brahmaloke antarahito vipassissa bhagavato arahato sammāsambuddhassa purato pātur ahoṣi.

『長阿含經』001「大本經」(大正01 p.8b):時梵天王知毘婆尸如來所念。
……譬如力士屈伸臂頃。從梵天宮忽然來下。立於佛前。

[5-2] 大梵天:梵天界²⁸ → 王都バンドウマティー・ケーマ鹿園(槃頭城・鹿野園)にいたヴィパッシン佛の面前²⁹

DN.014 'Mahāpadāna-s.' (vol.II pp.46-47) : atha kho bhikkhave aññataro mahābrahmā vipassissa bhagavato arahato sammāsambuddhassa cetasa cetoparivitakkam aññāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya. evam eva brahmaloke antarahito vipassissa bhagavato arahato sammāsambuddhassa purato pātur ahoṣi.……atha kho bhikkhave aññataro mahābrahmā mama cetaso cetoparivitakkam aññāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito mama purato pātur ahoṣi.

『長阿含經』001「大本經」(大正01 p.10a):時。首陀會天知如來心。譬如力士屈伸臂頃。從彼天沒。忽然至此。於世尊前。……即禮佛足。忽然不現。還至天上。

[5-3] サナンクマーラ梵天:梵天界 → マハーゴウヴィンダ婆羅門の面前³⁰

²⁸ 『長阿含經』001では大梵天ではなく、淨居(首陀會)天となっており、淨居天が淨居天から降りる。*Mahāvādānasūtra*の記述(p.152)も同じ。

²⁹ 大梵天がヴィパッシン佛に、弟子が遊行に出ることの許可を願う。*Mahāvādānasūtra*の記述(p.152) atha devatāḥ sūdhāvāse sthitās tasya cetasā sittaṃ aññāya bhagavantam avocaṃ と、『毘婆尸佛經』の記述(大正01 p.157c)「於虛空中有一天子。知佛心念。告毘婆尸佛言」は、臂の屈伸喩を含まない。

³⁰ 『長阿含經』003「典尊經」(大正01 p.032b)「時梵天王。即化為童子。五角髻。在典尊上虛空中坐」、『大堅固婆羅門緣起經』(大正01 p.211a)「爾時大梵天王。現光未久。從北而來虛空中住。」は臂の屈伸喩を含まない。*Mahāvastu*, ed. by É.

(56)

DN.019 'Mahāgovinda-s.' (vol.II pp.239-240) : atha kho bho brahmā sanamkumāro mahāgovindassa brāhmaṇassa cetasā cetoparivitakkam aññāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito mahāgovindassa brāhmaṇassa pamukhe pātur ahoṣi.

[5-5] サハンパティ梵天：梵天界 → アジャパーラ・ニグローダ樹下の釋尊の面前³¹

MN.026 'Ariyapariyesana-s.' (vol.I p.168) : atha kho bhikkhave brahmā sahapati seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya, evam evaṃ brahmaloke antarahito mama purato pātur ahoṣi.³²

MN.085 'Bodhirājakumāra-s.' (vol.II p.091) : [atha kho rājakumāra brahmā sahapati seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito mama purato pātur ahoṣi.]³³

SN.006-001-001 (vol.I p.137) : atha kho brahmā sahapati seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahoṣi.

Vinaya 'Mahākkhandhaka' (vol.I p.004) : atha kho brahmā sahapati, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahoṣi.

『増壹阿含經』 019-001 (大正 02 p.593b) 爾時梵天在梵天上。遙知如來

Senart, Pari, 1882-97.vol. I, pp. 210-211 も同じ。

³¹ 釋尊への梵天勸請の記述をここに集める。資料によっては釋尊の所在をアジャパーラ・ニグローダ樹下としないが、特に注記はしない。

³² これに対応する『中阿含經』 204「羅摩經」(大正 01 pp.775c-778c) には梵天勸請の件が欠落している。

³³ 繰り返しのため、ここは刊本に省略されている。

所念。猶如士夫屈伸臂頃。從梵天上沒不現。來至世尊所。

[5-6] サハンパティ梵天：梵天界 → アジャパーラ・ニグローダ樹下の釋尊の面前³⁴

SN.047-018 (vol.V p.167) : atha kho brahmā sahampati bhagavato cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahosi.

SN.047-043 (vol.V p.185) : atha kho bhikkhave brahmā sahampati mama cetasā cetoparivitakkam aññāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito mama purato pātur ahosi.

『雜阿含經』1189³⁵(大正02 p.322b):爾時娑婆世界主梵天王。知佛心念已。譬如力士屈伸臂頃。於梵天沒住於佛前。

『別訳雜阿含經』102(大正02 p.410b):時梵主天。遙知如來心之所念。……譬如壯士屈伸臂頃。來至佛所。

『(101)雜阿含經』(大正01 p.494b):梵便知我所念。譬如健人申臂屈復申。梵如是從天上止我前。

[5-7] サハンパティ梵天：梵天界 → アジャパーラ・ニグローダ樹下の釋尊の面前³⁶

SN.006-001-002 (vol.I p.139) : atha kho brahmā sahampati bhagavato cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahosi.

³⁴ これは釋尊に「四念處は一乘道である」との考えが浮かび、それを梵天が是とするという内容である。

³⁵ 『雜阿含經』607(大正02 p.171a)には梵天が登場しないが、同じく四念處を「一乘道」とする説法である。

³⁶ これは釋尊に「尊敬するもののない生活は苦である。私は自らが覺った法を尊敬して住もう」との考えが浮かび、これを梵天が是とするという内容である。

AN.004-003-021 (vol.II pp.20-21) : atha kho bhikkhave brahmā sahampati mama cetasā cetoparivitakkam ñāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito mama purato pātur ahoṣi.

『雜阿含經』1188 (大正 02 p.322a) : 爾時娑婆世界主梵天王。知世尊心念已。如力士屈伸臂頃。從梵天沒住於佛前。

『別雜阿含經』101 (大正 02 p.410b) : 時梵主天。譬如壯士屈伸臂頃。來至佛所。

[5-8] サハンパティ梵天：梵天界 → アジャパーラ・ニグローダ樹下の釋尊の面前³⁷

SN.048-057 (vol.V p.232) : atha kho brahmā sahampati bhagavato cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahoṣi.

[5-9] サハンパティ梵天：梵天界 → チャートウマー・アーマラキー林の釋尊の面前³⁸

MN.067 'Cātuma-s.' (vol.I p.458) : atha kho brahmā sahampati bhagavato cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam evam brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahoṣi.

『增壹阿含經』045-002 (大正 02 p.771a) : 是時梵天王。知如來心中所念。猶如力士屈伸臂頃。從梵天沒。來至如來所。

『舍利弗摩訶目連遊四衢經』(大正 02 p.860c) : 於時梵天忽然來下。即住佛前。

³⁷ これは釋尊に「五根を修習すれば不死に究竟する」との考えが浮かび、これを梵天が是とするという内容である。漢譯に對應が見出せない。

³⁸ 釋尊の所在を『增壹阿含經』045-002は「釋迦・閻婆梨果園」、『遊四衢經』は「釋氏・舍夷阿摩勒藥樹園」とする。

[5-10] サハンパティ梵天：梵天界 → 舍衛城のブラフマデーヴァ長老の母の家³⁹

SN.006-001-003 (vol.I p.141) : atha kho brahmā sahaṃpati seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ brahmaloke antarahito āyasmato brahmadevassa mātu nivesane pātur ahoṣi.

[5-11] Paccekabrahman (Subrahmau と Suddhavāsa) : 釋尊の面前
→ 梵天界⁴⁰

SN.006-001-006 (vol.I p.147) : atha kho subrahmā ca paccekabrahmā suddhavāso ca paccekabrahmā seyyathā pi nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya.] evam evaṃ bhagavato purato antarahitā tasmim loke pātur ahesuṃ.

[5-12] サハンパティ梵天：梵天界 → カピラ城・大林・ベールヴァラッティカー樹下の釋尊の面前

³⁹ 『雜阿含經』 099 (大正 02 p.027c) は「時毘沙門天王。諸夜叉導從。乘虛而行。見尊者淨天在門外立。又見其母手擎飲食。在中堂上供養祀火。不見其子在門外立。」とし、『別譯雜阿含經』 265 (大正 02 p.466c) は「爾時毘沙門天王敬信梵天。即與無數夜叉之衆乘虛而行。見梵天母祠祀於火不見其兒。唯見道人謂己子。」とする。また『雜阿含經』 099 はブラフマデーヴァ(淨天)長老の母の所在をミティラー(彌絺羅城)に、『別譯雜阿含經』 265 は梵天長老の母の所在をチャンパー(瞻波城)とする。

⁴⁰ Subrahman と Suddhavāsa という名の 2 人の Paccekabrahman が釋尊を訪問する件では臂の屈伸喩が用いられず、単に「世尊に近づいた」(yena bhagavā ten' upasaṅkamimsu) と表現される。つづいて 2 人は「今は世尊を訪問するべき時ではない」として他の梵天を誘うために再び梵天界に戻るが、そこで臂の屈伸喩が用いられている。漢譯では『雜阿含經』 1194 (大正 02 p.324a-b) が「時彼善梵天別梵天。善臂別梵天往詣佛所。稽首佛足。……佛說此經已。彼諸梵天聞佛所說。歡喜隨喜。稽首佛足。即沒不現。」として、『別譯雜阿含經』 107 (大正 02 p.412a-b) は「爾時二梵。說是偈已。來詣佛所。……二梵聞法。歡喜頂禮。還於天宮」とするのみで臂の屈伸喩はない。なお『雜阿含經』 1194 の「善臂別梵天」の譯語からは Subrahmau ではなく Subāhu という原語が想定される。

SN.022-080 (vol.III p.091) : atha kho brahmā sahapati bhagavato cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ brahmaloke antarahito bhagavato purato pātur ahoṣi.

『雜阿含經』272(大正 02 p.071c) : 時大梵王。知佛心念。如力士屈伸臂頃。從梵天沒。住於佛前。

[5-13] サハンパティ梵天：梵天界 → コーサラ・空閑無聚落處の釋尊の面前⁴¹

『雜阿含經』1191 (大正 02 p.322c) : 時娑婆世界主梵天王……譬如力士屈伸臂頃。於梵天沒住於佛前。

『別訳雜阿含經』104 (大正 02 p.411a) : 時梵主天。即於彼沒。譬如壯士屈申臂頃。來詣佛所。

[6] 淨居天が淨居天と人間界を行き來する。

[6-1] 淨居天衆：淨居天 → カピラヴァットゥ・大林の釋尊の面前⁴²

DN.020 'Mahāsamaya-s.' (vol.II p.253) : atha kho tā devatā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva suddhāvāsesu devesu antarahitā bhagavato purato pātur ahamsu.

SN.001-004-007 (vol.I p.026) : atha kho tā devatāyo seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ suddhāvāsesu devesu antarahitā bhagavato

⁴¹ 『別訳雜阿含經』104は釋尊の所在を「阿蘭住處」とする。なお對應する SN.006-002-003, vol. I, p. 154 は釋尊の所在をマガダのアンダカヴィンダ (Andhakavinda) とし、移動を atha kho brahmā sahapati abhikkantāya rattiyā abhikkantavaṇṇo kevalakappaṃ andhakavindaṃ obhāsetvā yena bhagavā ten' upasaṅkami と表現しており、臂の屈伸喩を含まない。

⁴² 『大三摩惹經』(大正 01 p.258a) は「爾時十方。復有釋梵大威德諸天。與諸眷屬恭敬圍繞。身色端嚴。光明照耀。來迦毗羅林。詣世尊前。頭面禮足。住立一面。時四大梵王各以伽陀而頌佛德。」として臂の屈伸喩を含まない。また淨居天ではなく、梵天とする。

purato pātur ahesum.

『長阿含經』019「大會經」(大正01 p.079b)：時四淨居天。猶如力士屈伸臂頃。於彼天沒。至釋迦提迦維林中。

『雜阿含經』1192(大正02 p.323a)：今日佛住迦毘羅衛國。如上廣說。乃至供養世尊及諸大衆。我今當往各各讚歎。作是念已。譬如力士屈伸臂頃。從梵天沒住於佛前。

『別譯雜阿含經』105(大正02 p.411b)時梵身天。作是念已。即於彼沒。譬如壯士屈伸臂頃。來至佛所。

[6-2] チッタ天子(チッタ長者の死後)：無熱天(アタツパ天)⁴³ → 菴羅聚落・菴羅林(マツチカーサンダ・アンバータカ・アーラーマ)⁴⁴
『雜阿含經』575(大正02 p.153b)：質多羅長者說此偈已。尋即命終。生於不煩熱天。爾時質多羅天子。……如力士屈伸臂頃。以天神力。至菴羅林中。放身天光。遍照菴羅林。

[6-3] ハツタカ天子(Hatthaka Ālavaka 長者の死後)：無熱(アタツパ)天 → 曠野精舍の釋尊の面前⁴⁵

『雜阿含經』594(大正02 p.159a)：曠野長者疾病命終。生無熱天。生彼天已。即作是念。我今不應久於此住不見世尊。作是念已。如力士

⁴³ 「不煩熱天」という譯語はアヴィハ(無煩)天かアタツパ(無熱)天のどちらかに對應すると思われるが、いずれをとるか決定が困難である。今は前者をとる。

⁴⁴ 「菴羅聚落・菴羅林」はSN.041-010, vol. IV, p.302において釋尊の所在とされているMacchikāsaṇḍaのAmbātakārāmaに對應するであろう。SN.041-010はチッタ居士の命終で終わるのでこの箇所を有さない。

⁴⁵ AN.003-013-125, vol. I, p. 278と『別譯雜阿含經』188(大正02 p.442b)はこの時の釋尊の所在を祇園とする。AN.003-013-125, vol. I, p. 278はatha kho hatthako devaputto abhikkantāyā rattiyā abhikkantavaṇṇā kevalakappam jetavanam obhāsetvā yena bhagavā ten' upasaṅkamiとし、『別譯雜阿含經』188の記述は「時首長者如來去後。尋於其夜。身壞命終。生無熱天。既生天已。即作此念。我於今者。應往佛所。作是念已。尋來佛所。光色倍常。照于祇洹。悉皆大明」とするのみで、臂の屈伸喻を含まない。

またパーリではハツタカ天子は、アタツパ(無熱)天ではなく、アヴィハ(aviha 無煩)天から降りてくる。

屈申臂頃。從無熱天沒。現於佛前。

[6-4] 淨居天：淨居天 → サールハ長老の面前⁴⁶

Vinaya ‘Sattasatikakkhandhaka’ (vol.II p.302) : atha kho aññatarā suddhāvāsakāyikā devatā āyasmato sālhasa cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva suddhāvāsesu devesu antarahitā āyasmato sālhasa sammukhe pātur ahoṣi.

[7] 人が地上を行き來する

[7-1] ヴィパッシン佛：菩提樹下 → 王都バンドウマティー・ケーマ鹿園⁴⁷

DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (vol.II p.040) : atha kho bhikkhave vipassī bhagavā arahaṃ sammāsambuddho, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva kho bodhirukkhamaṭṭhā antarahito bandhumatiyā rājadhāniyā kheme migadāye pātur ahoṣi.

『長阿含經』001「大本經」(大正 01 p.8c) : 於是世尊。如力士屈伸臂頃。於道樹忽然不現。至槃頭城槃頭王鹿野苑中。

⁴⁶ 『四分律』「七百集法毘尼」(大正 22 p.970c) は「時婆搜村有長老在道行。……便知波梨國比丘是法語。波夷那比丘非法語。時有天不現身而讚言。善哉善男子。」とし、『五分律』「七百集法」(大正 22 p.193a-b) は「其船中伴有一持律比丘名沙蘭。竊獨思惟。跋耆比丘為如法不。即依諸經律察其所為。為不如法。時空中神三反唱言。如是如是。」とし、『十誦律』「七百比丘集滅惡法品」(大正 23 p.452a-b) は「爾時長老沙羅。住毘耶離國。……於一樹下敷尼師檀坐觀所誦法。……如是觀已。知毘耶離比丘不是。知阿槃提達嚩那婆多國諸客比丘是。是樹林中有神天。合手向沙羅言。如是如是長老。」としており、これらはいずれも天の移動の記事を有さない。

⁴⁷ *Mahāvādānasūtra* (p.146) は atha vipasī samyaksambuddho bodhimūlam yathābhiramyaṃ vihrtya yena bandhumatī rājadhāni tena caryāṃ prakrāntaḥ vipasī samyaksambuddho bandhumatim rājadhānim anuprāptaḥ とし、『毘婆尸經』(大正 01 p.156c) は「時毘婆尸佛既成道已。……即從座起整衣服手執應器次第行乞。往滿度摩城。詣安樂鹿野園中」として、単なる遊行として表現されている。

[7-2] 釋尊（比丘サンガとともに）：ガンガーの此岸 → 彼岸⁴⁸

DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol.II p.089) : atha kho bhagavā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ gaṅgāya nadiyā orimatīre antarahito pārimatīre paccutthāsi saddhim bhikkhusamghena.

Udāna 008-006 (p.090) : atha kho bhagavā seyyathā pi balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva gaṅgāya nadiyā orimatīre antarahito pārimatīre paccutthāsi saddhim bhikkhusamghena.

Vinaya ‘Bhesajjakhandhaka’ (vol.I p.230) : disvāna seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva gaṅgāya nadiyā orimatīre antarahito pārimatīre paccutthāsi saddhim bhikkhusamghena.

『長阿含經』002「遊行經」（大正01 p.012c）：爾時世尊與諸大眾。譬如力士屈伸臂頃。忽至彼岸。

[7-3] 目連：不明 → 祇園の阿那律の面前⁴⁹

SN.052-001 (vol.V p.294) : atha kho āyasmā mahāmoggallāno āyasmato anuruddhassa cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva āyasmato anuruddhassa sammukhe pātur ahoṣi.

⁴⁸ *Mahāparinirvāṇasūtra* では atha bhagavāṃs tadrūpaṃ samādhiṃ samāpanno yathā samāhite citte ‘pārimaṃ tīre ‘ntarhitāḥ pārimaṃ tīre pratyasthāt と、『根本有部律雜事』（大正24 p.385b）では「世尊見已作如是念。我今為當安步中流水上而去。為以神力從此岸沒於彼岸出。即入勝定隨其所念。并諸苾芻此沒彼出。」とされ、神變ではあるが異なる表現が用いられている。cf. Ernst Waldschmidt, *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil II, Berlin, 1951, p.158.

⁴⁹ *SN. 052-001,002* では阿那律の所在が舍衛城・祇園とされるのみで目連の所在が示されていない。しかし『雜阿含經』535では目連がヴァッジ（跋祇聚落 バグガの誤りか？）のスンスマラーギラ（失收摩羅山）のパーサカラー（恐怖稠）林から、舍衛城の阿那律のもとに至る。

SN.052-002 (vol.V pp.296-297) : atha kho āyasmā mahāmoggallāno
āyasmato anuruddhassa cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi
nāma balavā puriso [sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā
bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva āyasmato anuruddhassa pamukhe pātur
ahosi.

『雜阿含經』535 (大正 02 p.139b-c) 爾時尊者大目次連。知尊者阿那律
 心之所念。如力士屈伸臂頃。以神通力。於跋祇聚落。失收摩羅山。
 恐怖稠林。禽獸之處沒。至舍衛城松林精舍。尊者阿那律前現。……
 (139c) 時尊者大目健連即入三昧。從舍衛國松林精舍入三昧神通力。
 如力士屈伸臂頃。還到跋祇聚落。失收摩羅山。恐怖稠林禽獸住處。

『雜阿含經』536 (大正 02 p.139c) : 時尊者大目連連。即入三昧。從舍
 衛國松林精舍。入三昧神通力。如力士屈伸臂頃。還到跋祇聚落。失
 收摩羅山。恐怖稠林。禽獸住處⁵⁰

[7-4] 釋尊：祇園 → 東園鹿子母講堂の舍利弗の面前⁵¹

AN.002-004-005 (vol.I p.064) : atha kho bhagavā seyyathā pi nāma
balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ
sammiñjeyya evam eva jetavane antarahito pubbārāme migāramātu
pāsāde āyasmato sāriputtassa pamukhe pātur ahosi.

[7-5] 釋尊：耆闍崛山 ⇔ 寒林 (Sitavana) のソーナの面前⁵²

⁵⁰ この記事では「一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。乃至尊者大目健連問尊者阿那律」と
 「乃至」で目連がヴァッジから舍衛城・祇園に行く往路の記事が省略されている。

⁵¹ 『中阿含經』021「等心經」(大正 01 p.449b) は「諸等心天去後不久。於是世尊往
 至講堂比丘衆前」として釋尊は神變を用いず祇園から東園鹿子母講堂に移動し
 ている。

⁵² 過酷な修行を行うソーナ・コーリーヴィサに釋尊が「彈琴喩」を語る。

『中阿含經』123「沙門二十億經」(大正 01 p.612a)「爾時。世尊以他心智知。
 尊者沙門二十億心之所念。便告一比丘。汝往至彼。呼沙門二十億來」、『雜阿含經』
 254 (大正 02 p.062b)「爾時世尊知二十億耳心之所念。告一比丘。汝等今往
 二十億耳所。告言。世尊呼汝」、『四分律』「皮革捷度」(大正 22 p.844b)「佛言。
 喚來。比丘受教。往守籠那所。語言。世尊喚汝。守籠那聞佛喚。即往佛所」では

AN.006-006-055 (vol.III p.374) : atha kho bhagavā āyasmato soṇassa cetasā cetoparivittakam aññāya, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva kho gijjhakūte pabbate antarahito sītavane āyasmato sonassa sammukhe pātur ahoṣi. (p.375) atha kho bhagavā āyasmantaṃ soṇaṃ iminā ovādena ovaditvā, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva kho sītavane antarahito gijjhakūte pabbate pātur ahoṣi.

Vinaya ‘Cammakkhandhaka’ (vol.I p.182) : atha kho bhagavā āyasmato soṇassa cetasā cetoparivittakam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva gijjhakūte pabbate antarahito sītavane pātur ahoṣi. (p.183) atha kho bhagavā āyasmantaṃ soṇaṃ iminā ovādena ovaditvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam eva sītavane āyasmato sonassa sammukhe antarahito gijjhakūte pabbate pātur ahoṣi.

[7-6] 釋尊：バツガ・スンスマーラギラ・ベーサカラー林・鹿野園 → マガダ・カッタヴァーラムッタ村の目連の面前

AN.007-006-058 (vol.IV p.085) : disvā, seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya, pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva bhaggesu sumsumāragire bhesakaḷāvane migadāye antarahito magadhesu kallavālamuttaḡāme āyasmato mahāmoggallānassa pamukhe pātur ahoṣi.

『中阿含經』083「長老上尊睡眠經」(大正01 p.559c) : 世尊遙知。尊者大目犍連。獨安靜處宴坐思惟而便睡眠。世尊知已。即入如其像定。

釋尊がソーナを呼び寄せているので釋尊の移動はない。『五分律』『皮革法』(大正22 p.146b)は「世尊便往到其所。問二十億。」として釋尊は普通に移動している。

『增壹阿含經』023-003 (大正02 p.612a-b)「爾時。世尊遙知二十億耳心之所念。便騰遊虛空。至彼經行處。敷坐具而坐。是時。尊者二十億耳前至佛所」は神變を用いる點ではパーリと一致しているが臂の屈伸喩がない。

以如其像定。猶若力士屈申臂頃。從婆耆瘦羴山怖林鹿野園中忽沒不現。往摩竭國善知識村尊者大目犍連前。於是。世尊從定而寤。

『離睡經』(大正 01 p.837a) : 彼時世尊知。尊者大目乾連。獨在靜處經行睡已。即如其像三昧正受。以三昧意。猶若力士屈申臂頃。世尊亦如是。在婆祇尸牧摩鼻量鹿野苑中忽然不現。至摩竭善知識村在尊者大目乾連前

[7-7] 釋尊：バツガ・スンスマーラギラ・ベーサカラー林・鹿野園 ⇔
チェーティ・パーチャーナヴァンサダーヤの阿那律の面前

AN.008-003-030 (vol.IV p.229) : atha kho bhagavā āyasmato anuruddhassa cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva bhaggesu sumsumāragire bhesakalāvane migadāye antarahito cetīsu pācīnavamsadāye āyasmato anuruddhassa sammukhe pātūr ahoṣi. (p.232) atha kho bhagavā āyasmantaṃ anuruddhaṃ iminā ovādena ovaditvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva cetīsu pācīnavamsadāye antarahito bhaggesu sumsumāragire bhesakalāvane migadāye pātūr ahoṣi.

『中阿含經』074「八念經」(大正 01 pp.540c-541b) : 世尊知已。即入如其像定。以如其像定。猶若力士屈申臂頃。如是世尊從婆耆瘦羴山怖林鹿野園中忽沒不現。住枝提瘦水渚林中尊者阿那律陀前。是時。世尊便從定覺。是時。世尊便從定……入如其像定。以如其像定。猶若力士屈申臂頃。如是。世尊從枝提瘦水渚林中忽沒不見。住婆耆瘦羴山怖林鹿野園中。

『阿那律八念經』(大正 01 p.835c) : 一時佛在誓牧山求師樹下。賢者阿那律。在彼禪空澤中。坐思惟言。……佛以聖心逆知其意。譬如力士屈申臂頃。飛到其前。

[7-8] ある比丘：ヴェーサーリー・大林重閣講堂 ⇔ ヴァッグムダー河畔
諸比丘：ヴァッグムダー河畔 → 大林重閣講堂の釋尊の面前⁵³

Udāna 003-003 (p.026) : evam āvuso ti kho so bhikkhu āyasmato ānandassa paṭissutvā seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva mahāvane kūtāgārasālāyaṃ antarahito vaggumudāya nadiyā tīre tesam bhikkhūnaṃ purato pātur ahoṣi. evam āvuso ti kho te bhikkhū tassa bhikkhuno paṭissutvā senāsanam paṭisāmetvā pattacivaram ādāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam evaṃ vaggumudāya nadiyā tīre antarahitā mahāvane kūtāgārasālāyaṃ bhagavato sammukhe pātur ahesum.

[7-9] 釋尊：耆闍崛山 ⇔ 王舎城・マツダクッチ・鹿野園のカッピナの面前⁵⁴

Vinaya 'Uposathakkhandhaka' (vol.I p.105) : atha kho bhagavā āyasmato mahākappinassa cetasā cetoparivitakkam aññāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva gijjhakūte pabbate antarahito maddakucchismim migadāye āyasmato mahākappinassa pamukhe pātur ahoṣi. atha kho bhagavā āyasmantaṃ mahākappinaṃ dhammiyā kathāya sandassetvā samādapetvā samuttejetvā sampahaṃsetvā seyyathā

⁵³ ヤソージャ長老が500人の諸比丘とともに祇園の釋尊に会いに来る。客比丘と舊比丘が會つてにぎやかになり、釋尊はヤソージャらを追い出す。拒絶された彼らはヴァッジへ遊行して、ヴァッグムダー河畔で雨安居に入り、熱心に修行して阿羅漢果を得る。釋尊は隨意の間舎衛城に住してからヴェーサーリーへ行って大林重閣講堂に住し、ある比丘を遣わしてヴァッグムダー河畔にいるヤソージャらと呼ばびに行かせるが、その比丘が臂の屈伸喩を伴う神變で移動する。そして呼ばれたヤソージャら500人の比丘も神變によってヴァッグムダー河畔から大林重閣講堂へ移動する。

⁵⁴ 『四分律』「説戒捷度」の記事では釋尊の移動は耆闍崛山から Isigiripassa-kālasilā (仙人住處黒石山側) にである。なお『五分律』「布薩法」(大正22 pp.121c-122a) は「爾時世尊。知其所念。於王舎城沒。涌出其前就座」として臂の屈伸喩を欠く。

pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā
bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva maddakucchismim miḡadāye āyasmato
mahākappinassa pamukhe antarahito gijjhakūte pabbate pātur ahoṣi.

『四分律』「説戒撻度」（大正 22 p.818b）：爾時世尊。知長老**大迦賓**恣心中所念。譬如力士屈申臂頃。從耆闍崛山忽然不現。乃在仙人住處**黑石山**側。在迦賓**前**……時世尊以此因緣告迦賓已。譬如力士屈申臂頃。沒仙人住處**黑石山**。還耆闍崛山。就座而坐。」

[7-10] 目連：祇園 ⇔ マンダーキニー蓮池岸⁵⁵

Vinaya ‘Bhesajjakkhandhaka’ (vol.I p.214) : atha kho āyasmā mahāmoggallāno seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva jetavane antarahito mandākinīyā pokkharaniyā tīre pātur ahoṣi. (p.215) atha kho āyasmā mahāmoggallāno seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva mandākinīyā pokkharaniyā tīre antarahito jetavane pātur ahoṣi.
『四分律』「葉撻度」（大正 22 p.867c）：時**目連**見舍利弗默然。即於舍衛國沒不現。如人屈申臂頃。至彼池邊……時**目連**得藕根已。從此池忽然不現。還舍衛國。到祇桓中。

[7-11] 釋尊（比丘サンガとともに）：祇園 → ヴィサーカー・ミガラマターの家⁵⁶

⁵⁵『四分律』では‘Mandākinī’にあたる語を出さないが「阿耨大池から遠くないところにある 50 由旬の池」とある。『十誦律』「医薬法」（大正 23 p.190 下）は「長老大目連速。至漫陀耆尼池中。取藕」として特に目連の移動方法を記さない。Mandākinīについては浪花宣明『サーラサンガハ』平楽寺書店、1998 年、pp.532-537.

⁵⁶『十誦律』の「波夜提 087」（大正 23 p.128 上）と「衣法」（大正 23 p.195c）は同文で「爾時佛與大眾。著衣持鉢。衆僧圍繞俱詣其舍。」として、普通の移動としてある。『根本有部律』「波逸底迦 089」（大正 23 p.896b）「爾時佛與大眾。著衣持鉢。詣毘舍佉處既坐定已」、『鼻奈耶』（大正 24 p.878b）「佛。將比丘僧至毘舍佉舍。各次第坐。」も同様である。Jātaka-aṭṭhakathā 489, vol. IV, p. 315 は iddhibalena jeta-

Vinaya ‘Cīvarakkhandhaka’ (vol.I p.291) : atha kho bhagavā pubbaṅhasamayaṃ nivāsetvā pattaṅcīvaram ādāya seyyathā pi nāma balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya evam eva jetavane antarahito visākhāya migāramātuyā kotthake pātur ahoṣi.

『四分律』「捨墮 027」(大正 22 p.629a) : 世尊與大比丘僧千二百五十人俱。

譬如力士屈申臂頃。從祇桓精舍忽然不現。在毘舍佉母舍。就座而坐。

『五分律』「捨墮 017」(大正 22 p.032b) : 於是世尊。如力士屈伸臂頃。

與諸比丘沒普會講堂。踊出毘舍佉所敷座上。

[7-12] 釋尊：王舍城・竹園 → 耆闍崛山の目連の面前⁵⁷

『雜阿含經』501 (大正 02 p.132a) : 爾時世尊知我心念。於竹園精舍沒。

於耆闍崛山中現於我前。

『雜阿含經』502 (大正 02 p.132b) 爾時。世尊知我心念。如力士屈申臂

頃。以神通力。於竹園精舍沒。於耆闍崛山中現於我前。

4. 分 析

(1) 誰がこの神變を發揮するか

この臂の屈伸喩を伴って表現される瞬間移動の神變を發揮する人物(人)を表にまとめると以下のようなものである。ただしパーリ聖典の記事にもとづいており、對應漢譯などで人物や移動の出発点・到達点が異なっている、それは反映していない。パーリの記事を缺く資料には※を付した。

vane antarahito visākhāya kotthake pātur ahoṣi と神變として表現するが、臂の屈伸喩を含まない。

⁵⁷ 『雜阿含經』502 は『雜阿含經』501 のことが、回想の形で目連によって諸比丘に語られるという體裁である。なおこの二經に對應する SN.021-001, vol. II, pp. 273、SN.040-001 ~ 009, vol. IV, p. 262-270) では atha kho mam āvuso bhagavā iddhiyā upasaṅkamitvā etad avoca とされ、臂の屈伸喩を含まない。

表 I

	三十三天	梵天界	淨居天	地上
釋尊	[1-3] [1-4]	[2-2] [2-3]	[3-1]	[7-2] [7-4] [7-5] [7-6] [7-7] [7-9] [7-11] [※ 7-12]
過去佛シキン		[2-4]		
過去佛ヴィパッシン				[7-1]
目連	[1-1] [1-2]	[2-3] [2-5] [2-6]		[7-3] [7-10]
大迦葉		[2-3]		
マハーカッピナ		[2-3]		
阿那律		[2-3]		
「ある比丘」		[2-1]		[7-8]
「諸比丘」				[7-8]
諸仙人	[1-5]			
※コーラヴィヤ王	[※ 1-6]			

以上の表から、この神變を發揮する人物が佛や一部の佛弟子に必ずしも限定されないことがわかる。佛弟子は阿羅漢ばかりではない⁵⁸。また外道の諸仙人や在家者のコーラヴィヤ王も含まれている。

神については、四大王天に所属するヴェッサヴァナが人間界から三十三天に赴くケース（[4-4]）を除けば、彼らはその所属する天界から人間界に赴く。ここでも對應漢譯との異同は反映させず、パーリを缺く資料に※を付して表を作成する。

⁵⁸ [7-8] の「諸比丘」は文脈から明らかに阿羅漢に達しているが、[2-1] の「ある比丘」は四大の消え去る行方を訊ねるために諸神にもとへ赴く。阿羅漢はこのような思いを起こさないであろう。片山一良『長部戒蘊篇Ⅱ』大蔵出版、2003年、p.459、複註3。

表Ⅱ

色界	淨居天	無熱天	※チッタ天子	[※ 6-2] (不煩熱天 = 無熱天?)
			※ハッタカ天子	[※ 6-3]
			淨居天 (複数)	[6-1] [6-4]
	梵天		大梵天	[5-1] [5-2]
			サナンクマーラ梵天	[5-3]
			サハンパティ	[5-4] [5-6] [5-7] [5-8] [5-9] [5-10] [5-12] [※ 5-13]
			Paccekabrahman	[5-11]
欲界	兜卒天	※給孤獨天子	[※ 4-5]	
	三十三天	帝釋天	[4-2] [4-3] [4-4]	
		ヴィッサカンマ	[4-1]	
	四大王天	ヴェッサヴァナ	[4-4] (人間界 → 三十三天)	

(2) 移動範囲

臂の屈伸喩を伴って表現される瞬間移動の神變は、佛や佛弟子（人）が人間界⇄天界（三十三天、梵天界、淨居天）を行き來する場合、神々が天界⇄人間界を行き來する場合、佛や佛弟子が地上においてある地點とある地點の間を行き來する場合に分けられよう⁵⁹。

佛・佛弟子および神々、どちらとも人間界⇄天界の行き來については人間界⇄欲界天、人間界⇄色界天の行き來が限界であり、人間界⇄無色界天の行き來はない。「場所」、「地點」といった概念と相容れない無色界に「移動する」ことは不可能と考えられたからではなからうか。なお色界はたいてい梵天であり、淨居天のケースは例外的である。

⁵⁹ 三十三天が須弥山の頂上の地居天とされることを考慮に入れると、三十三天⇄人間界の行き來は地上における行き來に分類するべきかもしれないが、ここでは我々にとって現実的な移動であるか否かを判断基準として用いることにする。ただし人が人間界⇄三十三天を行き來する記事がDN.に皆無であることは注目に値するかもしれない。

このことに関連して、色界淨居天の神が地上に降りるケースに困難が伴うことを示す経がある。『雜阿含經』594では、ハッタカ居士が死後に無熱天に生まれ、釋尊に会いに来る（[6-3]）。大地に立つことができないので、釋尊は彼に鹿身を作るように指示する⁶⁰。これに對應するAN.003-013-125はハッタカ天子の移動「近づいた」（*upasaṅkami, upasaṅkamitvā*）とするのみで臂の屈伸喩が用いられていないが、大地に立つことができない件は一致している⁶¹。

なお欲界において人間界よりも下に向かう、例えば地獄に赴くようなケースは資料中がない。しかしながら『增壹阿含經』には見られる⁶²。

次に地上における行き來に關して、移動距離が短いことに注目したい。舍衛城から王舍城へといった長距離の移動が少なく、近隣の地域内に限られた範囲を移動するものが多い。

表Ⅲ

範囲	移動（主語）	資料	文献
ガンガ ー	此岸 → 彼岸 （釋尊が比丘サンガとともに）	[7-2]	<i>DN. Udāna Vinaya</i> 『長阿含經』
舍衛城 近隣	祇園 → 東園鹿子母講堂（釋尊） 祇園 → ヴィサーカー鹿子母の家 （釋尊が比丘サンガとともに）	[7-4] [7-11]	<i>AN.</i> <i>Vinaya</i> 『四分 律』『五分律』

⁶⁰ 『雜阿含經』594（大正02 p.159a）：時。彼天子天身委地。不能自立。猶如酥油委地。不能自立。如是。彼天子天身細軟。不自持立。爾時。世尊告彼天子。汝當變化作此鹿身。而立於地。時。彼天子即自化形。作此鹿身。而立於地。於是。天子前禮佛足。退坐一面。

⁶¹ AN.003-013-125, vol. I, pp. 278-279. 本論注45 參照。

⁶² 『增壹阿含經』021-005（大正02 p.603b）：是時尊者大目犍連。如力士屈伸臂頃。從舍衛沒不現。便至蓮華大地獄中。

『增壹阿含經』049-009（大正02 p.805a）：時大目連前禮佛足。繞佛三匝。即於佛前。猶如力士屈伸臂頃。即往至阿鼻地獄所。

王舎城 近隣	耆闍崛山 ⇔ 寒林 (釋尊)	[7-5]	<i>AN. Vinaya</i>
	耆闍崛山 ⇔ マッドグッチ鹿野園 (釋尊)	[7-9]	<i>Vinaya</i> 『四分律』
	※竹園 → 耆闍崛山 (釋尊)	※ [7-12]	『雜阿含經』
ヴェー サーリ ー近隣	大林重閣講堂 ⇔ ヴァッグムダー 河畔 (ある比丘) ヴァッグムダー河畔 → 大林重閣 講堂 (諸比丘)	[7-8]	<i>Udāna</i>
不明	菩提樹下 ⇔ 王都バンドウマテイ ー・ケーマ鹿園 (ヴィパッシン佛)	[7-1]	<i>DN.</i> 『長阿含經』
	不明 ⇔ 祇園 (目連)	[7-3]	<i>SN.</i> 『雜阿含經』
長 距 離?	バग्ガ → マガダ (釋尊)	[7-6]	<i>AN.</i> 『中阿含經』 『離睡經』
	バग्ガ ⇔ チェーティ (釋尊)	[7-7]	<i>AN.</i> 『中阿含經』 『阿那律八念 經』
神話 的 場所	祇園 ⇔ マンダーキニー蓮池岸 (目連)	[7-10]	<i>Vinaya</i> 『四分律』

移動範囲が不明なものもあるが、ある程度長距離が想定されるものとしては、バग्ガのスンスマーラギラを出発点として、マガダのカッラヴァーラムッタ村とチェーティのパーチーナヴァンサダーヤに赴く2件と⁶³、また1件、はるかかなたの神話的场所(マンダーキニー蓮池)に赴く記事がある。なおパーリと漢譯の異同に注目するならば、[7-3]の資料の中、パーリでは目連が不明地点から祇園の阿那律のもとに赴くが、對應する『雜阿含經』535,536はバग्ガ國のスンスマーラギラを出発点として舍衛城・祇園に至る長距離の移動となっている⁶⁴。地上における

⁶³ この2件についてはバग्ガ國の正確がなく位置不明のため、長距離と斷定することはできないが、バग्ガ國がヴェーサーリーと舍衛城の間に位置したとされることから、ある程度の距離を想定せざるを得ない。前田惠學『原始佛教聖典の成立史研究』山喜房佛書林、1964年、p.78、注31,32。なお筆者によるバग्ガ國の所在の推定は『原始仏教聖典資料による釈尊傳の研究』【6】【論文5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地傳承」p.109参照。

⁶⁴ 本論注49参照。

神變による移動で長距離が想定されるケースはバツガ國のススマーラギラを出発点とするもののみとなる。

5. 臂の屈伸喩の瞬間移動の神變はいかなるものか

以上の資料とその分析にもとづき、さらに収集した以外の資料も用いて、この臂の屈伸喩を伴う神變による瞬間移動について、これがどのようなものであるのか、考察して行く。

(1) 「速やかに」を意味するか

この力ある人の臂の屈伸喩を中村元氏は「極めて短い時間であることを表現するために、佛典の中に好んで用いられる句である。わが国でいう‘まばたきする間に’‘一瞬間に’に相當する」と説明する⁶⁵。この解釋は収集した資料中のパーリの資料からは必ずしも導き出されないとと思われる。しかし、以下のことから妥当な解釋であると思われる。

まずすべての漢譯資料が、例えば「……屈伸臂頃」という譯に見られるように、「頃」の一時を加えており、この「頃」は「しばらく」「わずかの時間」の意でとる他はないと思われる。

またアツカターに見られる南方上座部の註釋も、「力ある人」というのは、なぜなら非力の人には速やかに臂の屈伸ができず、力ある人だけが〔速やかに臂の屈伸が〕できるからである」となっていることもこの解釋を支持する⁶⁶。

さらにパーリ聖典において一件のみであるが、この臂の屈伸喩の意味するところが「速やかに、迅速に、容易に」と補われることで明確になっているものがある。それは MN.152 ‘Indriyabhāvanā-s.’ (vol.III p.300) に見られる用例であり、ここでは眼によって色を見、耳によって聲を聞き、鼻によって香を嗅ぎ、舌によって味わい、身によって触れ、意によって法を識別する際に生じる可意・不可意・可意不可意が、比丘

⁶⁵ 中村元『ブツガ最後の旅』岩波文庫、1984年、p.214、譯注40

⁶⁶ AN-A., vol.II, p. 137. *balavā puriso ti dubbalo hi khippaṃ samiñjanapasāraṇaṃ kātuṃ na sakkoti, balavā va sakkoti. ten’ etaṃ vuttaṃ.*

に速やかに、迅速に、容易に消滅して捨が確立することの譬喩として、「力ある人」を主語とする譬喩が4例用いられており、その一例が臂の屈伸喩である⁶⁷。

seyyathā pi ānanda balavā puriso sammiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammiñjeyya, evam eva kho ānanda yassa kassaci [evamsiḡham evamtuvatam evaṃ-appakasirena uppannaṃ manāpaṃ uppannaṃ amanāpaṃ uppannaṃ manāpāmanāpaṃ nirujjhati, upekkhā] saṅṭhāti.

「例えば阿難よ、力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように、まさにそのように、阿難よ、そのように速やかに、迅速に、容易に、捨が確立します。」

また上記資料に含まれていない梵語の文献も、この譬喩を「極めて短い時間であることを表現する」ものと理解することを支持する⁶⁸。

⁶⁷ MN.152 'Indriyabhāvanā-s.' vol. III, p. 300. 引用したものの他の3例は以下のものである。

seyyathāpi, ānanda, balavā puriso appakasirena accharikaṃ pahareyya, evam eva kho atakamo力ある人が容易に弾指するように、まさにそのように。

seyyathāpi, ānanda, balavā puriso jivhagge kheḷapiṇḍaṃ saṃyūhitvā appakasirena vameyya, evam eva kho

あたかも力ある人が舌先に唾団を集め容易に吐き出すように、まさにそのように。

seyyathāpi, ānanda, balavā puriso divasaṃ santatte ayothāhe dve vā tīṇi vā udakaphusitāni nipāteyya, dandho, ānanda, udakaphusitānaṃ nipāto, atha kho taṃ khippam eva parikkhayaṃ pariyādānaṃ gaccheyya, evam eva kho)」

あたかも力ある人が一日中熱された鐵版に水を2、3滴落とす。水滴の落下は遅くともたちまち消え失せるように、まさにそのように。

⁶⁸ *Divyāvadāna, A Collection of Eearly Buddhist Legends*, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886 に2回現れるものは、パーリとほぼ同じ。

Divyāvadāna (p.162) : atha śakrabrahmādayo devā anekāni ca devatāśatasahasrāṇi bhagavataś cetasā cittam ājñāya tadvyathā balavān purusah samkuñcitam vā bāhum prasārayet prasāritaṃ vā samkuñcayed evam eva śakrabrahmādayo devā anekāni ca devatāśatasahasrāṇi ca devaloke 'ntarhitāni bhagavataḥ purataḥ pratasthū.

その時、帝釋天や梵天などの神々と數百千の神々は、世尊の心を心で知って、

Mahāvastu に以下の用例が見出される。

athāyusmān mahāmaudgalyāyanaḥ tadyathāpi nāma balavān puruṣaḥ saṃmiñjitāṃ bāhuṃ prasārayet prasāritāṃ ca bāhuṃ saṃmiñjayet ekakṣaṇena padavītiḥāreṇa rājagrḥād vaihāyasam abhyudgamyā śuddhāvāsadevanikāye pratyasthāt⁶⁹.

それから尊者目連は、あたかも力ある者が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるような一刹那の間に、王舎城から空に昇って、淨居天に立った。

atha khalv āyusmān mahāmaudgalyāyanas tadyathā balavān puruṣaḥ saṃmiñjitāṃ bāhāṃ prasārayet prasāritāṃ vā bāhāṃ saṃmiñjayet ettakena kṣaṇavītiḥāreṇa śuddhāvāsato devanikāyāto antarhitāḥ rājagrḥe nagare pratyasthā⁷⁰.

それから尊者大目連は、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるような一刹那の間に、淨居天から隠れて、王舎城に立った。

athāhaṃ balavāṃ tadyathā puruṣaḥ saṃmiñjitāṃ bāhāṃ prasārayeya prasāritāṃ vā bāhāṃ saṃmiñjayet ettakena kṣaṇavītiḥāreṇa rājagrḥād vaihāyasam abhyudgamyā śuddhāvāse devanikāye pratyasthāsi⁷¹.

それから私はあたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように、王舎城から空に昇って、淨居天に立った。

atha bhagavān uruvilvākāśyapasya ṛṣisya imam evarūpaṃ cetaso parivīṭṭikam ājñāya tadyathāpi nāma balavāṃ puruṣo saṃmiñjitāṃ vā bāhāṃ prasāraye

あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばし、伸ばした臂を曲げるように、まさにそのように帝釋天・梵天などの神々と數百千の神々は天界において隠れ、世尊の面前に立った。

Divyāvadāna. (p. 473) : atha śakro devendra udārabrahmaṇarūpam ātmānam abhinirmāya sauvarṇadaṇḍakamaṇḍalum ādāya suvarṇadaṇḍena maṇivālvavyajanena vijyamānas tadyathā balavān puruṣaḥ saṃmiñjitāṃ bāhuṃ prasārayet prasāritāṃ saṃmiñjayet, evam eva śakro devānāmiṃdro deveṣu trāyastriṃśeṣv antarhita utpalāvatyām rājadhānyāṃ pratyasthāt.

それから帝釋天は高貴なバラモンの姿を自らとって、黄金製の杖と水瓶をもち、黄金製の杖と宝珠の扨子によって扇がれつつ、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばし、伸ばした臂を曲げるように、まさにそのように帝釋天は三十三天において隠れ、王都ウトパラヴァティーに立った。

⁶⁹ *Mahāvastu*, ed. by É. Senart, Paris, 1882-97. vol. I, pp. 54-55.

⁷⁰ *ibid.* p. 55.

⁷¹ *ibid.* p. 56.

prasāritām vā bāhām sammiṃjaye ettakena kṣanavītiḥāreṇa uruvilvākāśyapasya ṛṣisyāśramāto vaiḥāyasam abhyudgamyā uruvilvāyām senāpatigrāmake pratyasthāsi nadyā nairamjanāyās tīre ajapālasya nyagrodhamūle⁷².

それから世尊はウルヴィルヴァー迦葉仙のこのこのような心の所念を知って、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるような一刹那の間にウルヴィルヴァー迦葉仙の苦行處から空中に昇り、ウルヴィルヴァーのセーナーパティ村のナイランジャナー川の岸にあるアジャパーラ・ニャグロード樹の根元に立った。

atha khalu bhagavāṃ uruvilvākāśyapasya jaṭilasya imaṃ evarūpaṃ cetasaḥ parivitarḥam ājñāya tadyathāpi nāma balavāṃ puruṣo sammiṃjitām vā bāhām prasāraye prasāritām vā bāhām sammiṃjaye ettakena kṣanavītiḥāreṇa ajapālasya nyagrodhamūlāto vaiḥāyasam abhyudgamyā uruvilvākāśyapasya jaṭilasyāśrame pratyasthāsi⁷³.

それから世尊はウルヴィルヴァー迦葉結髮外道のこのような心の所念を知って、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるような一刹那の間に、アジャパーラ・ニャグロード樹下から空中に昇り、ウルヴィルヴァー迦葉結髮外道の苦行處に立った。

atha khalu bhikṣavo śroṇako ṛṣis tadyathāpi nāma balavāṃ puruṣo sammiṃjitām vā bāhām prasāraye prasāritām vā bāhām sammiṃjaye ettakena kṣanavītiḥāreṇānuhimavaṃtāto āśramāto vaiḥāyasam abhyudgamyā mahādevāmravane pratyasthāsi⁷⁴.

それから比丘らは、シュローナカ仙は、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるような一刹那の間に、雪山のふもとの苦行處から空中に昇って大天アームラ林に立った。

1 件だけ ekakṣaṇena padavītiḥāreṇa という語句を、その他は ettakena kṣaṇavītiḥāreṇa という語句を加えている。これによって臂の屈伸喩が「一刹那の間」を意味することが知られる。なお下線を付した「空中に昇って」(vaiḥāyasam abhyudgamyā) という語句にも注目して欲しい。これ

⁷² *ibid.* vol. III, p. 425.

⁷³ *ibid.* vol. III, pp. 425-6.

⁷⁴ *ibid.* vol. III, p. 450.

については後述する。

この *Mahāvastu* の用例と一致する漢譯の例としては以下のようなものがある。「一刹那」の他に、同様に一瞬間であることを意味する 'lava' や 'muhūrta' を加えているものもある。

『大寶積經』「菩薩見實會」：譬如壯士屈申臂頃。一念之中

『大方廣如來祕藏經』(大正 17 p.838a)：猶如壯士屈伸臂頃。沒是常出大法音國。一念之頃。而來至此娑婆世界。

『諸法最上王經』(大正 17 p.860a)：譬如大力丈夫屈申臂頃。如是彼皆以佛威力。於一念時。向王舍城竹林迦蘭陀精舍。

『聖善住意天子所問經』(大正 12 p.117b)：譬如壯士屈申臂頃。一刹那頃。一羅婆頃。摩睺多頃。

『勝思惟梵天所問經』(大正 15 p.064a)：譬如壯士屈申臂頃。一刹那頃。一羅婆頃。一無俟多頃。

また瞬間移動とは関係のない文脈でも、臂の屈伸喩が「速やかに」を意味して用いられている。それは命終した衆生が「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げる」ほどの間に、地獄や善處に生まれ変わるという文脈で現れる。ただしパーリ聖典中にはこの用例は見出されない。

『中阿含經』020「破羅牢經」(大正 01 p.445c)：若有作是說。沙門瞿曇知幻。即是幻者。彼未斷此語。聞彼心彼欲彼願彼聞彼念彼觀。如屈伸臂頃。命終生地獄中。波羅牢伽彌尼聞已。怖懼戰慄。身毛皆豎⁷⁵。

『中阿含經』170「鸚鵡經」(大正 01 p.704a-c)：鸚鵡摩納都提子今命終者。如屈伸臂頃。必生地獄。……世尊告曰。鸚鵡摩納今命終者。如屈伸臂頃必至善處。

『鸚鵡經』(大正 01 pp.888c-889b)：若以此時鸚鵡摩牢兜羅子命終者。屈申臂頃。如是生泥犁中。……若以此時。鸚鵡摩牢兜羅子命終者。如屈申臂頃。生於善處⁷⁶。

⁷⁵ 對應經 SN.042-013, vol. IV, p.340 では文脈が異なり、如屈伸臂頃に對應する語なし。

⁷⁶ MN.099 'Subha-s.' vol. II, p. 196.

『增壹阿含經』009-005 (大正 02 p.562c) : 此人如屈伸臂頃。墮泥黎中。

『增壹阿含經』009-006 (大正 02 p.563a) : 如屈伸臂頃。而生天上。

『增壹阿含經』043-007(大正 02 p.764a) : 佛告王曰。世有二種人。無罪而命終。
如屈伸臂頃。得生天上。云何爲二。一者不造罪本而修其善。

『增壹阿含經』046-007 (大正 02 p.778a-b) : 若成就十法者。如屈伸臂頃。
便生天上。……如是比丘成就十法者。如屈伸臂頃。生善處天上。

以上のことから、この臂の屈伸が「極めて短い時間であることを表現する」譬喩であることに異論の餘地はない。

(2) 表現のヴァリエーションによる考察

資料の中には、パーリでは臂の屈伸喩を伴って神變として表現されていても、對應する漢譯では神變による移動とされていないケース、または同じく神變による移動ではあっても、異なる表現で記述されているケースもある。逆に、漢譯では臂の屈伸喩を伴って表現されていても、パーリでそのようになっていないケースもある。

これらの相違は、あるいは部派の見解の差異に起因するものもあろうが、この神變の実態を知る手がかりを與えてくれよう。

臂の屈伸喩の神變と「～に近づいた」(upasaṅkami)

『中阿含經』130「教曇彌經」([1-6])ではコーラブヤ(高羅婆)王が臂の屈伸喩を伴う神變でクル國から三十三天の帝釋天のもとに赴く。それからコーラヴィヤ王は帝釋天とともに同様の仕方で三十三天からクル國に戻る。對應する AN.006-005-054 では「それからコーラヴィヤ王は帝釋天に近づいた」(atha kho rājā koravyo yena sakko devānam indo ten' upasaṅkami, upasaṅkamitvā sakkam devānam indam) とする。

このように瞬間移動神變による移動を對應經が「～に近づいた」(yena ~ ten' upasaṅkami) に置き換えるケースが以下にも見られる。

『雜阿含經』593 ([4-5])では、命終した給孤獨が兜卒天から臂の屈伸喩を伴う神變で祇園の釋尊のもとに至る。對應する SN.002-002-010 は「近づいた」(yena ~ ten' upasaṅkami) とするのみである⁷⁷。

⁷⁷ 本論注 26 参照。

『雜阿含經』1191と『別譯雜阿含經』104 ([5-13])においてサハ
ンパティ梵天が釋尊の面前に到來する臂の屈伸喩の神變による移動が
SN.006-002-003では「～に近づいた」で表現される⁷⁸。

『雜阿含經』594 ([6-3])がハツタカ天子の移動を臂の屈伸喩の神變
とするのに対し、AN.003-013-125と『別譯雜阿含經』188は「～に近づ
いた」「尋來佛所」で表現している⁷⁹。

諸資料 ([6-1])が臂の屈伸喩の神變で表現する移動を、『大三摩惹經』
は「來迦毘羅林。詣世尊前」としている⁸⁰。

またパーリでもSN.006-001-006 ([5-11])のように、獨梵天
(Pacceka⁸¹brahman)が釋尊を訪問する件では「近づいた」と表現し、梵
天界に戻る箇所は臂の屈伸喩の神變によって示すものもある⁸¹。

このように臂の屈伸喩の神變と「～に近づいた」は交替可能な表現
である。しかしながら、このケースでは表現が交替しても、その表現し
ようとする状況に違いを生じることはないであろう。臂の屈伸喩をの神
變の記述を缺いても、たんに「近づいた」時の手段が示されていないだ
けの違いと見なすことができる。

臂の屈伸喩の神變と遊行

上記の「～に近づいた」という表現は、天界⇄人間界の移動に關し
ては、臂の屈伸喩の神變の記述の有無によって意味内容が變わることは
ないと思われる。たとい「～に近づいた」という表現が用いられていても、
そこには神變による移動が含意されると見る他はないからである。しか
しながら地上における移動ではそうではない。

釋尊が祇園と東園鹿子母講堂とを神變で行き來するAN.002-004-005
([7-4])、釋尊が耆闍崛山と寒林とを神變で行き來するAN.006-006-055
とVinaya 'Cammakkhandhaka' ([7-5])では、前者に對應する『中阿含
經』021は「於是世尊往至講堂比丘衆前」とし⁸²、後者に對應する記事の

⁷⁸ 本論注 41 參照。

⁷⁹ 本論注 45 參照。

⁸⁰ 本論注 42 參照。

⁸¹ 本論注 40 參照。

⁸² 本論注 51 參照。

一つである『五分律』「皮革法」は「世尊便往到其所。問二十億。」とする⁸³。これらの記述は、必ずしも神變による移動を否定するものではないが、素直に讀むならば釋尊が普通に歩いて移動している様を思い浮かべる他ないであろう。釋尊が祇園からヴィサーカー・ミガーラマターの家に向く記事（[7-11]）と、これに對應する『十誦律』、『根本説一切有部毘奈耶』、『鼻奈耶』の記事との關係も同様である⁸⁴。

過去佛ヴィパッシンが菩提樹下から王都バンドゥマティーに赴く記事（[7-1]）ではDN.014と『長阿含經』001「大本經」が臂の屈伸喩の神變の記事であるが、對應する *Mahāvadānasūtra* と『毘婆尸經』は遊行として (*caryāṃ prakrāntaḥ*) 表現している⁸⁵。この場合は遊行であることを明記しているために、神變による移動は否定される。

このように地上における神變による瞬間移動は、文脈上の要請から必然である場合（[7-2] など）を除けば、容易に神變を用いない表現と交替すると考えられる。上で行った移動範囲の分析において、地上における行き來に關して移動距離が短いものが多い理由は、一つには、神變によって移動する必然のない何気ない移動の記述が神變の記述に置き換えられたことが考えられる。

臂の屈伸喩の神變と空中浮遊

SN.006-001-003 はサハンパティ梵天が梵天界から臂の屈伸喩を伴う神變でブラフマデーヴァ長老の母の住處に現れる記事であるが（[5-10]）、對應する『雜阿含經』099 と『別譯雜阿含經』265 はこの移動を「乘虚而行」と表現する⁸⁶。同様に釋尊が耆闍崛山と寒林のソーナのもととを行き來する移動は（[7-5]）、對應する『增壹阿含經』023-003 では「便騰遊虚空」と表現される。単なる表現の違いであるとするならば、この臂の屈伸喩を伴う神變は空中浮遊による瞬間移動であることになる。

また臂の屈伸喩と空中浮遊の表現を併記する資料も存在する。先に擧げた「空中に昇って」(*vaiḥāyasam abhyudgama*) を伴う *Mahāvastu*

⁸³ 本論注 52 參照。

⁸⁴ 本論注 56 參照。

⁸⁵ 本論注 47 參照。

⁸⁶ 本論注 39 參照。

の記事の他に、『阿那律八念經』の「譬如力士屈伸臂頃。飛到其前。」〔7-7〕がこれに該当する。

しかしながら、瞬間移動の神變と空中浮遊神變を同一視することは、サハンプティ梵天のケースを人間ではないという理由で除外すると、資料が『增壹阿含經』、*Mahāvastu*、『阿那律八念經』のみとなって少ないため、注意を要する。瞬間移動の神變と空中浮遊の神變の関係については後に考察する。

臂の屈伸喩の神變と三昧

臂の屈伸喩の瞬間移動の表現のヴァリエーションとして、禪定と関連付けて説くものが多い。

『中阿含經』078「梵天請佛經」〔2-2〕、『中阿含經』083「長老上尊睡眠經」〔7-6〕、『中阿含經』074「八念經」〔7-7〕に「即入如其像定。以如其像定。猶若力士屈伸臂頃」とある。『離睡經』〔7-6〕には「即如其像三昧正受。以三昧意。猶若力士屈伸臂頃。」とある。

また『雜阿含經』535,536〔7-3〕は目連が祇園からバツガ國のンスマーラギラに歸る復路において「入三昧神通力。如力士屈伸臂頃」としている。

同様に、資料中には挙げていない『根本有部律』「破僧違諫學處」の記事も存する⁸⁷。

目連梵天去後。即如其事而入勝定。猶如壯士屈伸臂頃。於恐懼林沒至

⁸⁷『根本有部律』「破僧違諫學處」大正 23 p.701c. これはデーヴァダッタの破僧に關する記事である。パーリ *Vinaya* の該當箇所には臂の屈伸喩を欠くので資料中には挙げていない。

Vinaya 'Saṅghabhedhakkhandhaka' vol. II, pp. 185-186 : idam avoca kakudho devaputto, idaṃ vatvā āyasmantaṃ mahāmoggallānaṃ abhivādetvā padakkhiṇaṃ katvā tatthū eva antaradhāyi. atha kho āyasmā mahāmoggallāno yena bhagavā ten' upasaṅkami,

『四分律』「僧殘 010」（大正 22 p.592a）時迦休天子作此語已。頭面作禮遶竟。即沒不現。時目連夜過已往世尊所。

『五分律』「僧殘 010」（大正 22 p.018a）於是目連。晨朝整衣服往詣佛所。以柯然言具以白佛。

『十誦律』「調達事」（大正 23 p.258a）目連受〔迦扶陀〕梵天請已。即入禪定。於支提國迦陵伽盧谷中沒。於王舍城現。離佛不遠。

竹林中。詣世尊所。……時大目連禮佛足已。即便入定。譬如壯士屈伸臂頃。於竹林沒往恐畏林。是時天授至佛所已。」

これを『根本説一切有部毘奈耶』の梵本（破僧事）は、以下のよう
に臂の屈伸喩を缺く形で表現している。

athāyusmān mahāmaudgalyānaḥ aciraprakrāntaṃ kakudaṃ brahmāṇaṃ viditvā
tadrūpaṃ sāmādhim samāpannaḥ, yathā samāhite citte bhārgaveṣv⁸⁸ antarhitāḥ
rājagṛhe pratyasṭhād veṇuvane kalandakanivāpe; athāyusmān mahāmaudgalyāyano
yena bhagavāms tenopasaṅkrāntaḥ;⁸⁹

それから長老目連はカクダ梵天が去ってまもなく、心が統一された時にバ
ッガ國において隠れて王舎城のカランダカ竹林に立つような、そのような三
昧に入った。それから長老目連は世尊に近づいた。

同様に臂の屈伸喩を缺く三昧による瞬間移動の記事は、釋尊がウツ
カッターから梵天界に赴く記事（[2-2]）に對應する『雜阿含經』1195
の「入於三昧。如其正受。於王舎城沒。住梵天上。」や⁹⁰、釋尊をはじめ
他の佛弟子が祇園から梵天界に赴く記事（[2-3]）に對應する『雜阿含經』
1196の「即入三昧。如其正受。於舍衛國沒。現梵天宮。當彼梵天頂上」
と『別譯雜阿含經』109の「入於三昧。從閻浮提沒。現於梵頂虛空中坐」
に⁹¹、また釋尊がガンガーの此岸から彼岸に渡る記事（[7-2]）に對應す
る *Mahāparinirvāṇasūtra* にも見られる⁹²。

同様に *Divyāvadāna* にも以下のように臂の屈伸喩を缺く三昧による移
動の例が見出される。

⁸⁸ Bhārgaveṣu とするが Bhargeṣu の誤りか。Bhagga 國の梵語形は Bhargā である。cf. *Divyāvadāna : A Collection of Eearly Buddhist Legends*, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886, p.182.

⁸⁹ *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Part II, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1978, p. 74.

⁹⁰ 本論注 14 參照。

⁹¹ 本論注 15 參照。

⁹² 本論注 48 參照。

tata āyusmān pūrṇas tadrūpaṃ samādhim samāpanno yathā samāhite citte śroṇāparāntake 'ntarhito mahāsamudre vahanasīmāyāṃ paryaṅkaṃ baddhvāvasthitaḥ⁹³.

それから長老プールナは心が統一された時にシュローナーパラータカにおいて隠れて大海の船のふちに結跏趺坐しているような、そのような三昧に入った。

梵語文献で臂の屈伸喩と三昧に入る記述を併記するものとしては、*Avadānaśataka* No.86 *Aupapādika* 中の記事がある。

athāyusmān mahāmaudgalyāyano nīraprakrāntāś catasraḥ parśado viditvā tadrūpaṃ samādhim samāpanno yathā samāhite citte tadyathā balavān puruṣaḥ saṃkuñcitaṃ vā bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ vā saṃkuñcayed evam evāyusmān mahāmaudgalyāyanaḥ śrāvastyāṃ antarhito deveṣu trāyastriṃśeṣu pratyaṣṭhāt pāṇdukambalaśilāyāṃ pārijātasya kovidārasya nātidūre.⁹⁴

それから長老目連は四衆が去ってまもなく、心が統一した時に、あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように長老目連が舍衛城において隠れて三十三天のパーンドゥカンバラシラーのパーリジャータ樹とコーヴィダーラ樹の近くに立つような、そのような三昧に入った。

athāyusmān mahāmaudgalyāyano bhagavataḥ pratiśrutya pādau śirasā vanditvā tadrūpaṃ samādhim sampanno yathā samāhite citte tadyathā balavān puruṣaḥ saṃkuñcitaṃ bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ vā saṃkuñcayed evam evāyusmān mahāmaudgalyāyano deveṣu trāyastriṃśeṣv antarhito jambūdviṇḍe pratyaṣṭhāt.⁹⁵

それから長老目連は世尊に宜い、御足に頭をつけて礼拝してから、心が統一された時にあたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように長老目連が三十三天において隠れてジャンブ洲に立つような、そのような三昧に入った。

⁹³ *Dīvyāvadāna : A Collection of Early Buddhist Legends*, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886, p.42. また tadrūpaṃ samādhim sampanno yathā samāhite citte は他の文脈でも用いられている。pp.157, 161, 203, 494.

⁹⁴ *Avadānaśataka, A Century of Edifying Tales*, ed. by J.S. Speyer, St. Petersburg, 2 vols., 1906-1909 (Bibliotheca Buddhica ; 3), vol. II, p. 91.

⁹⁵ *ibid.* p. 94.

この *tadrūpaṃ sāmādhim samāpano yathā samāhite citte* という句は定型句であり、瞬間移動の神變に限らず、種々の神變や神通力が發揮される際の描写の中に頻出する。パーリ聖典では *tathārūpaṃ samādhim samāpajji yathā samāhite citte* または *tathārūpaṃ cetosamādhim phusati yathā samāhite citte* という句である⁹⁶。

臂の屈伸喩を伴う神變とは別の神通力を發揮する際に、この定型句が現れる数例を挙げれば以下のものがある。() 内にそれによって發揮される神通の名、または譯を示す。

DN.001 'Brahmajāla-s.' vol. I, p. 013 : *idha bhikkhave ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā ātappam anvāya padhānam anvāya anuyogam anvāya appamādam anvāya sammāmanasikāram anvāya tathārūpaṃ cetosamādhim phusati yathā samāhite citte anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarati.* (比丘らよ、ここにある沙門かバラモンは熱心さ・努力・専修・不放逸・正作意を通して、心が統一された時に過去の種々の前生を想起するような、そのような心三昧を得る。宿住隨念智)

『長阿含經』(大正 01 p.015c): 佛即於遮婆羅塔。定意三昧。捨命住壽。(捨壽行)

『中阿含經』(大正 01 p.478c): 尊者大目乾連。即入如其像定。以如其像定他心之智。觀察衆心。(他心智)

Mahāvastu : *yaśodo śreṣṭhiputro tathārūpāṃ cetosamādhim samāpadye yathā nam tatraiva *niṣaṇṇaṃ*⁹⁷ *mātāpitarau nādr̥sensuḥ na ca anyo janakāyaḥ*⁹⁸. (ヤシヨ一ダ長者子は、母父や他の人々がそこに坐っている彼(自身)を見なく

⁹⁶ これによく似た定型句として *tathārūpaṃ iddhābhisāṅkhāraṃ abhisāṅkhāsi yathā* というものがある。一例を挙げれば *Suttanipāta* (pp.107-108) に *atha kho bhagavā tathārūpaṃ iddhābhisāṅkhāraṃ abhisāṅkhāsi, yathā addasa selo brāhmaṇo bhagavato kosohitaṃ vatthaguyhaṃ* (それから世尊はセーラ婆羅門が世尊の陰馬藏を見るような、そのような神變行を行った)とある。これに對應する漢譯資料としては『中阿含經』(大正 01 p.688b)の「世尊知己。作如其像如意足。作如其像如意足已。梵志梵摩見世尊身陰馬藏及廣長舌。」などが挙げられる。しかしこの定型句と瞬間移動神變を關連づける資料は見出されないため、本論ではこれを扱わない。

⁹⁷ 底本は *niṣaṇṇasya* とするが、*niṣaṇṇaṃ* と訂正して讀む。

⁹⁸ *Mahāvastu*, ed. by É. Senart, Paris, 1882-97. vol. III, p. 409.

なるような、そのような心三昧に入った。隱匿神變⁹⁹⁾

Divyāvādāna : atha bhagavāṃs tadrūpaṃ samādhim samāpanno yathā samāhite citte 'rgaḍacchidreṅcīso nirgatyā bhagavataḥ prātihāryamaṇḍape nipatitāḥ, sarvas ca prātihāryamaṇḍapaḥ prajvalitāḥ¹⁰⁰. (その時世尊は、心が統一した時に、門穴を通して炎が噴出して、世尊が奇蹟を行う天幕に燃え移るような、そのような三昧に入った。奇蹟を行う天幕全體が燃え上がった。)

パーリでは臂の屈伸喩の定型句とこの禪定の定型句が併記されるものはないが、次の資料のように禪定による移動表現と臂の屈伸喩の神變を区別なく用いている記述が見られる。

DN.011 'Kevaddha-s.' の記述 ([2-1]) はある比丘が梵天界から釋尊の前に戻る場面であるが、この記述の始まりの箇所での比丘は「心が安定した時に天に至る道が現れるよう、それにふさわしい禪定に入り」、まず四大王天のところへ行¹⁰¹、四大が消える行方について尋ね、それから三十三天、帝釋天、ヤマ天、スヤーマ天、兜卒天、サントウシタ天、樂變化天、他化自在天、ヴァサヴァッティン天のところに行¹⁰²て同じ質問をする。それからさらに、この比丘は同様の仕方¹⁰³で三昧によって梵天界に至る。

このように往路は禪定によって近づくのであるが、復路は資料 ([2-1]) に示したように臂の屈伸喩の神變によって梵天界から地上の釋尊の面前に降りる。

DN.014 'Mahāpadāna-s.' の記事 ([3-1]) に對應する *Mahāvādānasūtra*¹⁰³

⁹⁹ cf. *Visuddhimagga*, p.393. 浪花宣明『サーラサンガハ』平樂寺書店、1998年、p.483.

¹⁰⁰ *Divyāvādāna*, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886, p.157.

¹⁰¹ *DN.011* 'Kevaddha-s.' vol. I, p. 215 : atha kho so kevaddha bhikkhu tathārūpaṃ samādhim samāpajji yathā samāhite citte devayāniyo maggo pātur ahoṣi. atha kho so kevaddha bhikkhu yena cātummahārājikā devā ten' upasaṃkami.

『長阿含經』024「堅固經」(大正01 p.102a) : 彼比丘倏趣天道。往至四天王所。

¹⁰² *DN.011* 'Kevaddha-s.' vol. I, p.220 : atha kho so kevaddha bhikkhu tathārūpaṃ samādhim samāpajji yathā samāhite citte brahmayāniyo maggo pātur ahoṣi. atha kho so kevaddha bhikkhu yena brahmakāyikā devā ten' upasaṃkami.

¹⁰³ The *Mahāvādānasūtra*, A New Edition Based on Manuscripts Discovered in Northern

(pp.158-162) の記事も同様である。

ここでは釋尊はまず臂の屈伸喩の神變でジャンプ洲において隠れて無煩天に立ち¹⁰⁴、つづいて三昧によって無煩天衆とともに無煩天において隠れて無熱天に立ち、同様に三昧によって無煩天衆と無熱天衆とともに善現天に、無煩天衆と無熱天衆と善現天衆とともに善見天に立つ¹⁰⁵。それから臂の屈伸喩の神變で無煩天衆、無熱天衆、善現天衆、善見天衆とともに善見天において隠れてアカニシュタ天に立つ¹⁰⁶。最後に釋尊は三昧によってアカニシュタ天において隠れてジャンプ洲に立つ¹⁰⁷。

臂の屈伸喩の神變と三昧による移動の表現は同じ状況を言い換えているものであり、臂の屈伸喩の有無によって表現している状況が異なるということではないであろう。

臂の屈伸喩の神變と意所成身

釋尊がバツガ國のスンスマーラギラのベーサカラ林の鹿野園とチエーティ國のパーチーナヴァンサダーヤの阿那律の面前を行き來する資料 ([7-7]) の AN.008-003-030 では、末尾に以下のような偈が付されている。

mama saṅkappam aññāya satthā loke anuttaro

manomayena kāyena iddhiyā upasaṅkami

世における無上の師は私の意向を知って、神變によって、意所成身をもつ

Turkestan, edited by Takamichi Fukita, Sanskrit Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 10, 2003.

¹⁰⁴ so 'ham tadyathā balavān puruṣaḥ sammiñjitaṃ vā bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ vā sammiñjayed evam evāhaṃ jambudvīpe 'ntarhito 'bṛhe devanikāye pratyasthām

¹⁰⁵ so 'ham tadrūpaṃ samādhim samāpanno yathā samāhite citte abhākāyikābhir devatābhiḥ sārddham abṛhe devanikāye 'ntarhito 'tape devanikāye yāvat sudarśane devanikāye pratyasthām pūrvavad yāvad

¹⁰⁶ so 'ham tadyathā balavān puruṣaḥ sammiñjitaṃ vā bāhuṃ prasārayet prasāritaṃ vā sammiñjayed evam evāhaṃ abhākāyikābhir devatābhiḥ sārddham atapakāyikābhir devatābhiḥ sārddham sudṛśakāyikābhir devatābhiḥ sārddham sudarśanakāyikābhir devatābhiḥ sārddham sudarśane devanikāye 'ntarhito 'kaniṣṭhe devanikāye pratyasthām

¹⁰⁷ so 'ham tadrūpaṃ samādhim samāpanno yathā samāhite citte akanīṣṭhe devanikāye aṃtarhito jambudvīpe pratyasthām.

て私に近づかれた¹⁰⁸。

釋尊が臂の屈伸喩の神變による瞬間移動でチェーティ國のパーチーナヴァンサダーヤの阿那律の面前に現れたことが「神變によって、意所成身をもって近づいた」と言い換えられていることになり、2つの表現が同じ状況を表現したものであることを示す。

ところが『中阿含經』074「八念經」では上の偈に對應するものが「遙知我思念 無上世間師 正身心入定 乘虛忽來到」となっていて意所成身に言及せず、かわりに空中浮遊神變の表現をとり¹⁰⁹、臂の屈伸喩の神變を空中浮遊の神變と同一視している。

臂の屈伸喩の神變を、神變者が意所成身を作り出してそれを目的地へと飛ばしているとの見方と、神變者自らが空中を瞬時に飛んで移動するとの見方との、2つの見方がここに見られる。

パーリには他に「意所成身をもって」(manomaya kāyena)を缺いた「神變によって近づく」(iddhiyā upasaṅkami)という表現があるが、これを臂の屈伸喩の神變の表現と同等のものと考えてを否定するような根拠は何一つないにしても、これを意所成身をもつての移動ととるか、空中浮遊ととるか、判断しかねる。

SN.021-003 と『雜阿含經』503 は以下のような記述を有する¹¹⁰。

ある時、釋尊は舍衛城にいて、舍利弗と目連が王舍城の竹林にいた。舍利弗が夕方に目連を訪ね、目連の諸根の清淨、顔色の清淨であるのを見て「汝は今日、寂靜住によって過ごされたか」と訊く。それに對し目連はそうではなくて麤住によって過ごしたと答える。その理由は釋尊とともに法について語ったからであるという。舍利弗は目連に「友よ、世尊は今、はるか舍衛城の祇園に住しておられ

¹⁰⁸ AN.008-003-030, vol. IV, p. 235. なお同文が *Theragāthā*, v.901 (アヌルッダの詩) にある。また *Apadāna*, vol. I, p. 235 の Tilamuṭṭhidāyaka 長老の詩が mama saṅkappam aññāya sathā lokagganāyako manomayena kāyena iddhiyā upasaṅkami として sathā loke anuttaro 「世における最上の師」を sathā lokagganāyako とする以外全同である。

¹⁰⁹ 『中阿含經』074「八念經」(大正01 p.542a)。『阿那律八念經』(大正01 p.836c)の偈は對應しない。

¹¹⁰ SN.021-003, vol. II, p. 275 と『雜阿含經』503 (大正02 p.132c)

る。目連長老が世尊のもとへ神變によって近づいたのか、それとも世尊が長老目連に神變によって近づいたのか」(dūre kho āvuso bhagavā etarahi sāvattthiyaṃ viharati jetavane anāthapiṇḍikassa ārāme. kiṃ nu kho āyasmā mahāmoggallāno bhagavantam iddhiyā upasaṅkami. udāhu bhagavā āyasmantaṃ mahāmoggallānaṃ iddhiyā upasaṅkami) と尋ね、それに對し目連はそのどちらでもないとして兩者を否定し、「私と世尊の天眼と天耳界が、同等に清まった」(apī ca me yāvata bhagavā ettāvata dibbacakkhu visujjhi dibbā ca sotadhātu. bhagavato pi yāvatahaṃ ettāvata dibbacakkhu visujjhi dibbā ca sotadhātu) と答えている。

これは、先の移動範囲の分析との関連で言えば、あるいは舍衛城⇄王舎城間を神變では瞬間移動できないことを示しているとも考えられるが、実際には瞬間移動の神變が用いられていない文脈であるため、意所成身か空中浮遊かの判断材料にはなるまい。

しかしこれと同じ「意所成身をもって」を缺く「神變によって近づく」(iddhiyā upasaṅkami または iddhiyā upasaṅkamitvā) という表現は、他に資料 [7-12] の『雜阿含經』に對應する SN.021-001 と SN.040-001 ~ 009 にも用いられている¹¹¹。これらにおいては、離れたところにいた釋尊が目連の所念を知って神變によって到來し、説法するというものであるから、状況は先述の AN.008-003-030 と一致している。しかし状況と語句の一部 (iddhiyā upasaṅkami) が一致しているからといって「〔意所成身をもって〕神變によって近づいた」と補って解釋するのは早計であろう。

以下の資料によれば、神變による移動は、多分に意所成身をもっての移動であると解される。意所成身が、瞬間移動を含む「種々の神變」(iddhividha) の前提になっているように解される諸經であり¹¹²、一例と

¹¹¹ 本論注 57 参照。

¹¹² 意所成身を「種々の神變」の前提と見る先學にヘルマン＝ベックがある。『長部經典』の瞑想の章では、物質的な肉體から“完全な感覺器官を具えた”靈気のないし靈的な身體を引き出すということが述べてあった。そこで、瞑想者はこれを道具に用いて超感覺的な完成、つまり一層高度な精神力の諸奇跡〔神通、神變〕を實現できる」。ヘルマン＝ベック (著)、渡邊照宏、渡邊重朗 (譯) 『佛教』(下)、岩波文庫、1977 年、pp.86-92、

して *DN.002* ‘Sāmaññaphala-s.’ に沿って次第を見る。

第四禪を得た者は、心が統一され、清浄となり、純白となり、汚れなく、付随煩惱を離れ、柔軟になり、行動に適し、確固不動のものになると、順次、①智見 (nāṇadassana)、②意所成身を化作すること (manomayaṃ kāyaṃ abhinimmāna)、③種々の神變 (iddhividha)、④天耳界 (dibbasotadhātu)、⑤他心智 (cetopariyañāṇa)、⑥宿住隨念智 (pubbenivāsānussatiñāṇa)、⑦死生智 (cutūpapātāñāṇa)、⑧漏尽智 (āsavana-khayañāṇa) に心を傾注するとされている¹¹³。

この次第は漢譯資料では『長阿含經』020「阿摩晝經」と『四分律』「雜捷度」に見られる¹¹⁴。この中③～⑧が六神通 (cha-abhiJJA) としてくくられるが、その中の③「種々の神變」に以下の10種が説かれる¹¹⁵。

(1) 一身になり、多身になる

巴：eko pi hutvā bahudhā hoti

梵 (*Mahāvastu*)：eko pi bhūtvā bahavo bhavati¹¹⁶

¹¹³ *DN.002* ‘Sāmaññaphala-s.’ vol. I, pp. 76-85. 他に *DN.003* ‘Ambaṭṭha-s.’ vol. I, p. 100 (ただしテキストに省かれている)、*DN.010* ‘Subha-s.’ vol. I, p. 209 (同様に省かれている)、*DN.004* ‘Soṇadaṇḍa-s.’ vol. I, p. 124 (同様に省かれている)、*MN.077* ‘Mahāsakuludāyi-s.’ vol. II, p.17-22がある。ただし *MN.* では第四禪の記述の後、①～⑤までを欠き、⑥宿住隨念智から説きはじめるものが多い。*MN.004* ‘Bhayabherava-s.’ (vol.I p.022) など。

¹¹⁴ 『長阿含經』020「阿摩晝經」(大正 01 pp.85c-86c)、『四分律』「雜捷度」(大正 22 pp.964b-966a)

¹¹⁵ 種々の神變を1「決意神變」(adhīṭṭhānā iddhi)、2「變化神變」(vikubbanā iddhi)、3「意所成神變」(manomayā iddhi)、4「智遍滿神變」(nāṇavipphārā iddhi)、5「定遍滿神變」(samādhivipphārā iddhi)、6「聖神通」(ariyā iddhi)、7「業異熟生神變」(kammavipākajā iddhi)、8「具福神變」(puññavato iddhi)、9「呪術所成神變」(vijjāmayā iddhi)、10「彼彼處正加行緣成神變」(tattha tattha sammāpayogapaccayā ijghanattṭhena iddhi) の10に分類し、その中の「決意神變」に一身多身などの10種を含ませるのが後世の南方上座部の分類である。*Paṭisambhidāmagga*, vol. II, p.205-*Visuddhimagga*, pp.378-。浪花宣明『サーラサンガハ』平楽寺書店、1998年、pp.475-491。

¹¹⁶ なお参考までに付した梵語形は *Mahāvastu*, ed. by É. Senart, Paris, 1882-97. vol. III, pp.

(2) 多身になり、また一身になる

巴：bahudhā pi hutvā eko hoti 梵：bahudhāpi bhūtva eko bhavati)

(3) 現れる

巴：āvirbhāvaṃ 梵：āvirbhāvaṃ

(4) 隠れる

巴：tirobhAvaM 梵：〔tirobhāvaṃ¹¹⁷〕

409-410 による。ここでは①②の次第には言及がない。他に *Mahāvīyūtpatti* (樹本) No.216 ~ 228 もあるが少し異なる。18 種を挙げるものに『菩薩地』や『撰大乘論』がある。長尾雅人『撰大乘論 和譯と注解 下』インド古典叢書、講談社、1987年、pp.213-216。参照。漢譯資料では種々のヴァリエーションがあり、枚舉に暇がない。漢譯阿含から數例を挙げる。

『長阿含經』020「阿摩晝經」(大正 01 p.86a)：一心修習神通智證、能種種變化。

(1) 變化一身為無數身。(2) 以無數身還合為一。(8) 身能飛行。(5) 石壁無礙、遊空如鳥。(7) 履水如地。身出烟燄、如火火藪。(9) 手捫日月。(10) 立至梵天。

『中阿含經』080「迦稀那經」(大正 01 p.553b)：心學如意足智通作證。諸賢。我得無量如意足。(1) 謂分一為衆。(2) 合衆為一。一則住一。(3) 有知有見。(5) 不礙石壁。猶如行空。(6) 沒地如水。(7) 履水如地。(8) 結跏趺坐。上昇虛空。猶如鳥翔。(9) 今此日月有大如意足、有大威德、有大福祐、有大威神、以手捫摸。(10) 身至梵天。

『別譯雜阿含經』117 (大正 02 p.417a)：我亦欲入神通等定。(1) 能以一身、作無量身。(2) 以無量身、還作一身。(5) 我欲觀察諸方上下、入于石壁、無有障礙、猶如虛空。(8) 坐臥空中、如彼鷹王。(6) 履地如水。(7) 履水如地。(10) 身至梵天。(9) 手捫日月。

『增壹阿含經』024-005 (大正 02 p.622b)：爾時。(1) 世尊或作若干形。(2) 還合為一。(4) 或不現。(3) 或現。(5) 石壁皆過、無所罣礙。(6) 或出地、或入地、猶如流水、無所觸礙。(8) 或結跏趺坐、滿虛空中、如鳥飛空、無有罣礙。亦如大火山。烟出無量。(9) 此日月有大神力、不可限量、以手往捉。(10) 身乃至梵天

『增壹阿含經』037-003 (大正 02 p.711a)：目連報曰。於是。比丘有大神足。於神足而得自在。彼能變化無數千事而無疑難。(1) 亦能分一身作無數身。(2) 或復還合為一。(5) 石壁皆過。(6) 踊沒自在、亦如駛河。(8) 猶如飛鳥在空中無跡。譬如暴火熾燒山野。(9) 亦如日月靡所不照、亦能舉手摩捫日月。(10) 亦能化身至梵天上

下線を施した火を發する神變は、パーリではこの10の「種々の神變」に含まれない。なお現時点では『雜阿含經』には「種々の神變」の記述を見出していない。

¹¹⁷ *Mahāvastu* の底本に欠。ただし異讀にはこれを有するものがある。

- (5) 壁・垣根・山を通り抜け、空中と同様に障害なく行く
巴：tirokuṭṭaṃ tiropākāraṃ tiropabbataṃ asajjamāno gacchati seyyathā pi ākāse
梵：tirokuḍyaṃ tirośailaṃ tiroparvateṣu asajjamāno gacchati
- (6) 大地において、水中におけると同様に出没する
巴：pathaviyā pi ummujjanimujjaṃ karoti seyyathā pi udake
梵：imasmiṃ ca pṛthivīyaṃ unmajjananimajjanaṃ karoti
- (7) 水上において、地上におけると同様に沈むことなく行く
巴：udake pi abhijjamāne gacchati seyyathā pi pathaviyā
梵：sayyathāpi nāma udake pi abhidyaṃ māno gacchati tadyathāpi nāma
pṛthivīyaṃ
- (8) 空中において足を組み、鳥のように進む
巴：ākāse pi pallaṅkena kamati seyyathā pi pakkhī sakuṇo
梵：缺
- (9) 月・太陽に手で触れる
巴：ime pi candimasūriye evaṃmahiddhike evaṃmahānubhāve pāṇinā
parāmasati parimajjati
梵：imāv api candrasūryā evaṃmaharddhikā evaṃmahānubhāvau paryaṅkena
niṣaṅgaḥ pāṇinā parimārjati parāmṛṣati)
- (10) 梵天界まで身體によって自在を行使する
巴：yāva brahmalokā pi kāyena vasaṃ vatteti
梵：yāvad brahmalokaṃ kāyena vaśe varteti

この10の「種々の神變」の中で直接的に臂の屈伸喩の神變に関わるのは、(10)「梵天界まで身體によって自在を行使する」と表現されているものであろう。

ここまでの次第で、③種々の神變の前に②「意所成身を化作すること」が置かれていることから考えると、意所成身が種々の神變すべての前提になっているとの假説が成り立つ。空中浮遊は「種々の神變」の中では(8)に該当するが、これも意所成身が空中を進むものと考えれば、空中浮遊の表現が用いられていても、意所成身をもって移動する神變であることに変わりはないということになる。

しかし、これに対して SN.051-022 の記事が「神變によって近づく」

ことをすべて意所成身によるものと解することを否定する¹¹⁸。

舍衛城において、阿難が釋尊を訪ね、「神變によって意所成身をもって梵天界に行ったことがありますか (*abhiñānāti nu kho bhante bhagavā iddhiyā manomayena kāyena brahmalokaṃ upasaṅkamitā*)」と訊ねる。釋尊はこれを肯定し、次に阿難は「この四大所成身(生得身)をもって神變によって梵天界に行ったことがありますか (*abhiñānāti kho pana bhante bhagavā iminā cātumahābhūtikena kāyena iddhiyā brahmalokaṃ upasaṅkamitā*)」と訊ねる。釋尊はこれも是とされ、阿難は驚くべきことだと称賛する。つづいて釋尊は阿難に對し、「身をも心に攝し、心をも身に攝し (*kāyam pi citte samodahati*¹¹⁹ *cittam pi kāye samodahati*)、身に樂相と輕相を置いて (*kāye sukhasaññaṇ ca lahusaññaṇ ca okkamitvā*) 住す時、如來の身は軽く、軟らかく、堪任・清淨となる」と説明し、これを熱せられた鐵丸が軽く軟らかくなることに喩え、この方法で「種々の神變」を發揮できるとする¹²⁰。また木綿 (*tūlapicu vā kappāsapicu vā*) が風を受けて容易に地より虚空に昇るように、如來の身體も容易に地より虚空に昇って「種々の神變」發揮すると述べる。

この經の對應漢譯經は見出されない。しかしながら『施設論』と『婆沙論』に引用されているため有部にも知られていたことが確實である¹²¹。ただし『婆沙論』では意所成身をもって梵天界に行くことは佛に

¹¹⁸ SN.051-022, vol.V, p. 282.

¹¹⁹ 底本は *samodahati* とするが、異讀と *Paṭisambhidāmagga*, vol.I, p. 111 によって *samodahati* と讀む。

¹²⁰ これに関連するものとして *Paṭisambhidāmagga*, vol.I, p. 111 や『解脱道論』(大正 32 p.442a) がある。

¹²¹ 全文を挙げる。

『施設論』(大正 26 p.528b) : 如經所說。佛於一時。謂尊者阿難言。汝可知不。我以如是意所成身。以神通力。隨意能往梵天宮殿。阿難白佛言。如是如是。我知世尊即以如是四大所成麤重色身。隨意能往梵天宮殿。佛言。阿難。我知如是色身麤重四大和合父母不淨羯邏藍等衆緣所成。雖假以飲食衣服澡沐資養種種治事。終歸磨滅。破散之法。願能往彼梵天宮殿。阿難白佛言。能往世尊。能往善逝。如世間鐵。及耕犁具。當在鼓鑄。炎火熾盛。未出火時。而彼鐵具。即皆輕利。加復柔軟。易爲舒卷。遇涼冷時。彼諸鐵具。厚重堅硬。而難舒卷。阿難。如來亦復如是。若時身心和融。輕安想生。加復柔軟。調暢安適。隨意能往梵天宮殿。又復當知。若心不相續。即心無依止。心無繫屬。以心無依止無繫屬故。身即自在。

も聲聞にも可能であるが、「よく神通力を離れて（禪定に入らずに）」四大所成身をもって行くことは佛のみの特性とされる點が SN.051-022 や『施設論』と異なる。

以上の記述によれば「神變によって近づく」移動には意所成身をもってする移動と四大所成身をもってする移動のどちらもあることになる。また四大所成身による移動について身體を軽くする方法を述べていることから、四大所成身による移動は空中浮遊になるであろう。

なお *Milindapañho* にも¹²²、佛と限定することなく、四大所成身をもって (cātummahābhūtikena kāyena) ウッタラクル、梵天界、他の洲に行くことができるとする記事がある。

また『清淨道論』は (10) を「梵天界をも限界として身體によって自在を行使する」(*yāva brahmalokāpī ti brahmalokam pi paricchedaṃ katvā kāyena vasaṃ vatteti*) と補い、『無礙解道』を引用した上でこれを詳しく註釋している¹²³。引用される『無礙解道』によればこの神變によって以下のようなことがなされる。

神變者 (iddhimant) にして心自在者 (cetovasipatta) が、梵天界に行こうと欲する時、(10-a) 遠を近にし、(10-b) 近を遠にする。(10-c) 多

『阿毘達磨大毘婆沙論』(大正 27 p.699a): 契經中說。佛告阿難。我之神力。能以意所成身。俟爾至於梵世。阿難白佛。何其劣哉。此事聲聞亦能。世尊何足自歎。謂所化作名意所成身。聲聞亦能以此至於梵世。佛若爾者。有何不共。世尊頗能離神通力。以龐大種父母生身。於俟忽間。至梵世不。世尊告曰。此我亦能。阿難復言。此事實難。願說譬喻令我信解。佛言。諦聽。如世間鐵。或餅或團置炎鑪中。漸輕漸軟漸調漸淨。隨意所爲。如是如來身隨心轉。繫心於身作輕軟等想。身隨心力成輕軟等事。由能繫心相續勢力。令所繫身運轉隨意。

此中有說。佛盡智時得欲界無覆無記。未曾得心心所法。由此勢力不入靜慮不起神通。纔發心時則能舉身至色究竟。何況梵世。

有作是說。世尊爾時起緣風心令身轉舉。

有餘師說。起緣空心能令佛身所往無礙。

有言。佛意則說此身名意所成。由隨意力成輕軟等運轉事故。離定通力能運此身。至梵世故與聲聞別。

有言。佛說意所成身則所化身不假定通能至梵世。與聲聞別。

有言。佛說由意勢通令所化身速至梵世。此捷疾力二乘等無。故佛依此自顯殊勝。

¹²² *Milindapañho*, p.84. 中村元・早島鏡正『ミリンダ王の問い1』平凡社東洋文庫、1963年、p.247、「神通力と心の自在力」參照。

¹²³ *Visuddhimagga*, pp.401-. *Paṭisambhidāmagga*, vol. II, p.209.

を少となし、(10-d) 少を多とする。(10-e) 天眼で梵天の色を見、(10-f) 天耳界で梵天の聲を聞き、(10-g) 他心智で梵天の心を知る。(10-h) 身を現したまま梵天界に行くことを欲する場合は、身力によって心を變易させ、身力によって心を受持して、樂想と輕想に入り、身を現したまま梵天界に至る。(10-i) 身を見えなくして梵天界に至ることを欲する場合は、心力によって身を變易せしめ、心力によって心を受持して、樂想と輕想に入り、身を見えなくして梵天界に至る。(10-j) 梵天の前に四肢五體・諸根を具備する意所成身を化作する。(10-k,l,m) 梵天界の意所成身と人間界の神變者は行住坐臥などを等しくする。

『清淨道論』はさらに(10-a)について、釋尊がユガンダラ山と須彌山を近づけて、地面から踏み出して片足をユガンダラ山に置き、次の一步で須彌山を踏んで「三十三天界にのぼった」という神變を紹介し¹²⁴、(10-h)について、虚空に道を化作して歩いて昇る、風によって木綿のように吹き上げられて梵天界まで飛んで行く、などの具体的な方法を述べ、(10-i)については、「身を捉えて心に乗せ、心に随わせて〔身を〕急速に行くこと (siṅhagamana) である。心の行くこと (cittagamana) は急速であるから」と、また移動は決意心 (adhiṭṭhānaciitta) の生・住・滅の3刹那のいずれにも起こると述べた上で「〔神變者は〕自ら行くのか、それとも所化(意所成身)を送るのか?—— 随意に行く。しかしここでは彼(神變者)が自ら行くことのみが趣意である」(kiṃ pana so sayam gacchati nimmitam peseti ti. yathārucci karoti. idha pan' assa sayam gamanam eva āgatam) と述べる¹²⁵。また(10-k,l,m)について、行住坐臥などの一致は聲聞の化身に限られるとして、佛の化身は世尊が行うことすべてを行い、また世尊の望むままに〔世尊の行うこととは〕他のことをも行うとする¹²⁶。

¹²⁴ この傳説は *Jātaka-atthavaṇṇanā* 483, p. 265, *Dhammapada-aṭṭhakathā*, vol. III, p. 216 などに見られる。

¹²⁵ *Visuddhimagga*, pp.405.

¹²⁶ 神變者自身と意所成身との行住坐臥が等しくなることについて、『施設論』、『俱舍論』と『婆沙論』が反對のことを述べる。すなわち『施設論』(大正 26 p.526a) によれば佛が語れば化人は黙し、化人が語れば佛は黙す。聲聞は能化が語れば所化も語り、能化が語れば所化も語る(若佛語言。化人即默。若化人語。佛即默然。

ここでも「梵天界まで身體によって自在を行使する」神變には意所成身を送るものと、自ら行く神變との2種類があるとされ、後者は「風によって木綿のように吹き上げられて梵天界まで飛んで行く」という表現からも空中浮遊を含意することになろう。

有部の見解としては、先に触れた SN.051-022 に對應する『施設論』と『婆沙論』の記事の他に、以下の、移動に関わる神變を3種に分類する『婆沙論』と『俱舍論』に見える記述がある。

『婆沙論』(大正 27 p.725b-c) : 復有三種神用。一運身。二勝解。三意勢。

運身神用者。謂舉身凌虛猶若飛鳥。亦如壁上所畫飛仙。

勝解神用者。謂於遠作近解由此力故。或住此洲手捫日月。或屈伸臂頃至色究竟天。

意勢神用者。謂眼識至色頂。或上至色究竟天。或傍越無邊世界。

問此三神用誰成就幾。有說。聲聞成一。謂運身。獨覺成二除意勢。唯佛世尊具成三種。有說。異生成一。謂運身。二乘成二除意勢。然聲聞運身所顯。獨覺意解所顯。佛具成三意勢所顯。

……彼聲聞弟子。……何故能化之者語言。所化之者亦言。能化之者若默。所化之者亦默。)。『俱舍論』(大正 29 p.144b) も佛の諸の定力は最も自在であるが故に、所化が語るのと〔化主である佛が語るのが〕同時ではないことが可能である。〔化主と所化とで〕言音の所詮が別々であることもできる(佛諸定力最自在故。與所化語容不俱時。言音所詮亦容有別)と述べる。

しかし『婆沙論』(大正 27 p.698c) では逆になり、世尊が語れば化身も語り、化身が語れば世尊も語るが、弟子では能化が語れば所化が黙し、所化が語れば能化が黙すという(世尊語時化身亦語。化身語時世尊亦語。弟子一時作化弟子。……弟子語時所化便默。所化語時弟子便默。)。『清淨道論』と一致するのは『施設論』『俱舍論』の説である。平岡聡『ブッダが謎解く三世の物語 上』大蔵出版、2007年、p.92, p.287 に言及あり。

この經証として DN.018 'Janavasabha-s.' vol. II, p. 212 の以下の偈が擧げられる。

ekasmiṃ bhāsamānasmim sabbe bhāsanti nimmitā,

ekasmiṃ tuṅhīm āsīne sabbe tuṅhī bhavanti te.

一人が話す時には所化もみな話す。

一人が黙して坐る時には、彼ら(所化)もみな黙す。

これに對應する漢譯は『長阿含經』004「闍尼沙經」(大正 01 p.036a) であり、そこにも「而彼梵童一化身語。餘化亦語。一化身默。餘化亦默」とある。

『俱舍論』（大正 29 pp.143c-144a）：此有二種。謂行及化。行復三種。

一者運身。謂乘空行猶如飛鳥。

二者勝解。謂極遠方作近思惟便能速至。

三者意勢。謂極遠方舉心緣時身即能至。此勢如意得意勢名。於此三中意勢唯佛。

運身勝解亦通餘乘。謂我世尊神通迅速隨方遠近舉心即至。由此世尊作如是說。諸佛境界不可思議。故意勢行唯世尊有。勝解兼餘聖。運身并異生。

『俱舍論』によれば、「神境」に「行」（gamana, gati）と「化」（nirmāṇa）の 2 種があり、その「行」を「運身」（śarīravāhīni-gati）、「勝解」（ādhimokṣikī-gati）、「意勢」（manojavā-gati）の 3 つに分ける¹²⁷。

『婆沙論』、『俱舍論』一致して「運身」に空中浮遊（8）を配當し、「勝解」に『婆沙論』は「遠くを近くにすると」「月・太陽に手で触れる」を配當して臂の屈伸譬もここに用いているが、『俱舍論』は「遠くを近くにすると」（10）のみを配當する。佛のみの特性とされる「意勢」は「種々の神變」中に含まれていないように見える。

「運身」（śarīravāhīni）は原語から考えて、意所成身ではなく、肉體で移動する神變であろう。「意勢」も、明確ではないが『俱舍論』の「身即能至」という表現からやはり肉體が移動すると思われる。「勝解」はどちらであるか判断できない。

「運身」と「意勢」については *Divyāvadāna* の記事が具體例になる¹²⁸。

釋尊が祇園からスールパーラカに赴き、その復路において、マリーチカ世界に生まれ変わった目連の母の供養を受ける件がある。行きは目連の神變で須彌山の頂上に足を置いて出発し、7 日間かけてマリーチカ

¹²⁷ 『俱舍論』（大正 29 p.143c）神體謂等持 境二謂行化 行三意勢佛 運身勝解通。
rddhiḥ samādhiḥ gamanaṃ nirmāṇaṃ ca gatis tridhā /
śāstur manojavā anyeṣāṃ vāhiṇy apy ādhimokṣikī // *Abhidharmakośa* 7.48 //

¹²⁸ *Divyāvadāna*, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886, pp. 52-53. なお『根本説一切有部毘奈耶藥事』（大正 24 p.16c）にも同様の記述があり、そこでは「意勢」は「速念神通」と譯されている。平岡聡『ブツダが謎解く三世の物語 上』大蔵出版、2007年、p.92, p.116（注 232）

世界に到着し、歸りは釋尊の 'manojavā' という神變 (ṛddhi) で一瞬にして祇園に到着するが、その神變は目連が祇園を「念ずる」(sam-anv-ā√hr) だけでマリーチカ世界から祇園に至るというものである。

この記事に見られる7日間かかる目連の神變は、「運身」の空中浮遊のように思われる。「意勢」も素直に讀めば肉體の移動ということになる。

「勝解」の具體例としては『根本説一切有部毘奈耶破僧事』に舍利弗が「勝解行定」(Adhimokṣika-samādhi) に入り、水で阿鼻地獄を充滿させるというものが見出されるが¹²⁹、これは移動の神變ではなく、上記の『婆沙論』『俱舍論』の「勝解」とどのように関連するものか定かではない。

しかしながら、「意勢」に關して、先の釋尊が意所成身と四大所成身のどちらでも梵天界に至れるとする記事に戻ってみると、『婆沙論』の記事では神通力を離れて四大所成身によって梵天界に行くのは佛のみの特性とされるが、このことに関し『婆沙論』に以下のような異説が擧げられている¹³⁰。

- (I) 此中有説。佛盡智時得欲界無覆無記。未曾得心心所法。由此勢力不入靜慮不起神通。纔發心時則能舉身至色究竟。何況梵世。
- (II) 有作是説。世尊爾時起縁風心令身轉舉。
- (III) 有餘師説。起縁空心能令佛身所往無礙。
- (IV) 有言。佛意則説此身名意所成。由隨意力成輕軟等運轉事故。雖定通力能運此身。至梵世故與聲聞別。
- (V) 有言。佛説意所成身則所化身不假定通能至梵世。與聲聞別。
- (VI) 有言。佛説由意勢通令所化身速至梵世。此捷疾力二乘等無。故佛依此自顯殊勝。

この中、(VI) によれば「意勢」は「所化身」(意所成身) を梵天界に送ることである¹³¹。

¹²⁹ 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(大正 24 p.150b)、*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Part II, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1978, pp. 262-263.

¹³⁰ 本論注 121 參照。

¹³¹ なお (IV) は「佛意則説此身名意所成」を「佛の身體はすなわち意所成身である」の意でとるならば、これは説出世部の見解と一致するであろう。cf. *Mahāvastu*, ed.

では有部の見解と南方上座部の見解の関係はどのようなものであるか。

「運身」は(10-h)「身を現したまま梵天界に行くこと」について、『清淨道論』が「風によって木綿のように吹き上げられて梵天界まで飛んで行く」とするのが該当するであろう。

「勝解」に関連を有するのは(10-a)「遠を近にする」であるが、『清淨道論』が挙げる具体例はユガンダラ山と須彌山を近づけるという神變であって、身體の移動ではない。

「意勢」は、『清淨道論』が(10-i)「身體を見えなくして梵天界に行くこと」について「身を捉えて心に乗せ、心に随わせて〔身を〕急速に行くこと (sīhagamana) である。心の行くこと (cittagamana) は急速であるから」と述べているが、「意勢」はこれともっとも関連が深いように思われる。またこれは *Milindapañho* において¹³²、臂の屈伸喩の神變に關して、ミリンダ王が200由旬隔たった故郷のアラサンダを思い起すこと ($\sqrt{\text{smṛ}}$) を、王がそこに行ったことと同一に見ようとするナーガセーナの説明とも軌を一にしよう。

このように、神變によって何をなせるかとしての「種々の神變」は諸部派共通の見解であっても、それをどのように分類し、位置付けるかは部派によって大きく異なっていることが知られる。また、移動の神變が意所成身をもってなされるか、空中浮遊によってなされるかの答えも、例えば、南方上座部は意所成身で、有部や説出世部¹³³は空中浮遊であったといったものではなく、同一部派の中でも二つの見解があったか、もしくはどちらでもよかったといった問題のようである。

6. 臂の屈伸喩の神變のイメージの變遷 (假説)

本論で明らかになったのは以下のようなことである。

by É. Senart, Pari, 1882-97. vol. I, p. 218. manomayena rūpeṇa prādurbhonti tathāgatā.

¹³² *Milindapañho*, p. 82. 中村元・早島鏡正『ミリンダ王の問い1』平凡社東洋文庫、1963年、p.241、「神通力をもつ者」参照。

¹³³ *Mahāvastu* が臂の屈伸喩の神變に「空中に昇り」(vaihāyasam abhyudgamyā) という語句を加えることは本論の「5. 臂の屈伸喩の瞬間移動はいかなるものか」の「(1)「速やかに」を意味するか」を参照。

1. 臂の屈伸喩の神變は、阿羅漢に限らず、禪定をおさめるものであれば誰でも發揮できる。
2. 佛や佛弟子が發揮するにせよ、神々が發揮するにせよ、人間界⇄色界を限界とし、無色界への行き来はない。色界では梵天界に赴く記事が多く、淨居天は例外的である。
3. 地上における移動では長距離を移動しない。ただしバツガ國のSNSマーラギラを出発点とする例外的に長距離が想定される移動がある。
4. 臂の屈伸喩の神變は三昧によって發揮され、意所成身をもつての移動と四大所成身をもつての自ら行く移動の両者がイメージされている。後者は空中浮遊を含意する。

本論は「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように」という譬喩を伴う瞬間移動の神變の表現に着目して、資料を集め、ヴァリエーションを整理し、その上で、この神變にまつわるイメージの變遷を明らかにしようとする展望をもって開始したものであるが、現時点では、未だ明確になっていないことが積み重なっており、目的に達することはできない。しかしながら、本論執筆の過程で得られた、この神變に付随するイメージの變遷に関する筆者の假説を述べて、本論のまとめとしたい。以下に述べることはあくまでも假説であるので、最終的には全く異なる結論が導き出されることも考えられる。

本来、この臂の屈伸喩に代表される瞬間移動の神變の表現は、人間界⇄天界の行き来を前提とした表現であったと思われる。この根拠は、パーリに限って言い得ることであるが、人間界⇄天界の行き来の資料が聖典中に偏りなく見られるのに対し、地上における移動は偏りがあり、MN. に皆無であって、AN. や Vinaya に集中してその記述が多く見られ、その他の二カーヤには少ない（皆無ではない）ことである。

人間界⇄天界の行き来に限定されている限り、禪定の階梯と天界の階梯とがすでに関連づけられた後ならば「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように」速やかに梵天界などに至るとするのは、すなわち速やかにその天界に對應する禪定に入ることを意味

し¹³⁴、それを移動の神變として表現したに過ぎないであろう。しかしながら神々が天界から地上に降りてくるケースも同様に考えられるか否かは現時点では不明である。

なお、ある時点まで天界への移動は梵天界を限界とすると考えられていた、もしくは淨居天という天界は未だ知られていなかったことが、「種々の神變」の中の「梵天界まで身體によって自在を行使する」という表現に示されている。この「種々の神變」の表現が定まった時点では、人間界⇄淨居天の行き來は未だ考慮の外にあった。それ故、釋尊が淨居天に赴く記事（[3-1]）や、目連が淨居天に赴く記事は¹³⁵ それ以降に成立したと考えられる¹³⁶。

しかしながら人間界⇄無色界の行き來への言及がないことについては別個に考えるべきで、無色界の諸天の概念が導入されたのもそれ以後であるかといったことは議論されるべきではない。DN.002 ‘Sāmaññaphala-s.’ などの記述が、「意所成身の化作」を「種々の神變」の前段に置くことがその根拠であるが、本来、移動の神變は意所成身をもつての移動が前提となっており、「梵天界まで身體によって自在を行使する」とは意所成身によって自在に振る舞うという意味であった。「もう一つの、有色の、意所成の、大小の四肢のそろった、無缺の感官を具えた身体」(aññaṃ kāyaṃ ... rūpiṃ manomayaṃ

¹³⁴ このように禪定と天界の関連をとらえることはヘルマン＝ベック（著）、渡邊照宏、渡邊重朗（譯）『佛教』（下）、岩波文庫、1977年、pp.48-92、水野弘元『原始佛教』サーラ叢書、1956年、p.76-84などと一致するであろう。ヘルマン＝ベックは論述の中でAN.008-007-064, vol. IV, p. 302（『中阿含經』073「天經」大正01 p.539bが對應する）を紹介している。しかしながら三十三天と對應する禪定の想定には慎重を要する。人が神變によって人間界⇄三十三天を行き來する記事がDN.に皆無ということが考慮されるべきかもしれない。

¹³⁵ 本論「5. 臂の屈伸喩の神變はいかなるものか」「(1)「速やかに」を意味するか」に紹介したMahāvastuの記事を参照。

¹³⁶ その証拠として『大般若波羅蜜經』（大正05 p.045bなど）では「(1)變一為多。(2)變多為一。(3)或顯。(4)或隱。(5)迅速無礙、山崖牆壁直過如空。(6)凌虛往來猶如飛鳥。(7)地中出沒如出沒水。(8)水上經行如經行地。身出煙焰如燎高原。體注衆流如銷雪嶺。(9)日月神德威勢難當以手拉摩光明隱蔽。(10)乃至淨居轉身自在。」となっている。

sabbaṅgapaccaṅgiṃ ahinindriyaṃ) と表現される意所成身が無色界にあることは概念的にもそぐわず、それ故、無色界に神變で赴く表現がないのであろう。

次の段階で「臂の屈伸喩」の神變が地上における瞬間移動に適用され、[7-3] [7-6] [7-7] [7-9] [7-12] のような、釋尊が遠方から佛弟子の前に、もしくは目連が他の佛弟子の前に忽然と現われ、説法の後に再び姿を消すというプロットが作られた(ただし該当する記事がすべて同時に成立する必然性はないから、ある一例がこの段階において成立したのであり、それを模倣して作られた記事は次に述べる最終段階のものよりも後に成立したということはあり得る)。この段階においても意所成身をもっての移動が前提になっており¹³⁷、釋尊は佛弟子の前に現れた後、再び元の釋尊自身がいる地點に戻る。この段階までは、人間界⇔天界の行き来にせよ、地上における移動にせよ、この神變は神變者が往復する文脈でのみ用いられた。復路の記事が脱落していても、それは省略されたと思見し得る。

そして最終段階においては、意所成身をもっての移動という制限がなくなり、佛や佛弟子が地上を神變で自由に行き来できるようになった。意所成身を送る神變では恐らく目的地にいる対告衆に説法をするのが限界と考えられたであろう。しかし制限がなくなると、目的地から何かをとってくるといったことが可能であると考えられるようになる。[7-10] の *Vinaya* と『四分律』に見られる、目連が舍利弗のためにマンダーキーニ蓮池岸に行って蓮根 (bhisa, muḷālika) をとってくるという記事がその一例である。この段階の特徴は、神變による移動を前提としてプロットが組まれているとは限らず、すでにできあがっていたプロットに改変を加えた結果であるものが少なくない。それ故、文脈上必然ではない箇所にも神變による移動が用いられている。釋尊の何気ない移動の記述に神變の記述を採用したために、釋尊が祇園からわざわざ神變を用いて東園鹿子母講堂に現れるという(釋尊がまるで横着であるかのような)不

¹³⁷ しかしながら「意所成身をもって神變によって近づいた」(manomayena kāyena iddhiyā upasaṅkami) と取って明言する記述は、四大所成身をもっての移動も考慮された以降であろう。

自然な記事ができあがった。對應箇所には神變を用いない移動を記述する異傳を有している資料（[7-1] [7-4] [7-5] [7-11]、本論「臂の屈伸喩と遊行」参照）がこの最終段階に歸せられるであろう。

ここで難問となるのが [7-2] の釋尊が神變によってガンガーを渡る記述である。これをいずれの段階に含めるべきか。南傳も北傳も一致してこれを傳えており、神變を用いずに渡ったとする異傳は存在しない。

あくまでも假定であるが、最終段階よりも以前、つまり未だ意所成身が前提であった段階に歸せられるのではなかろうか。もちろんこの記述が、釋尊が王舍城からガンガーを渡ってヴェーサーリーに、それからクシナーラーに赴く文脈に置かれていれば、意所成身をもつての移動では具合が悪い。「涅槃經」が編集本であって、すなわち本来獨立していた經を集めて編集したり、ある程度まとまって形をなした後にさらに記事が挿入されたりしたものであると假定すればこの問題は回避できるが、現時点ではこの点についてのこれ以上の考察はできない¹³⁸。

しかし釋尊が神變によってガンガーを渡るこの記述こそが、「涅槃經」の文脈に置かれた時に最終段階への架け橋になったのかもしれない。釋尊はこの文脈においては、どうしても意所成身ではなく肉體ごとガンガーを渡らねばならない（この記述ほどそのことが文脈から要請される箇所は他に見られない）。このように考えれば、移動の神變が意所成身と四大所成身のどちらをもつてもなされることを敢えて説く經（SN.051-022）の存在理由が説明できる。

¹³⁸ しかしながら筆者は現行の *Udāna* の該當記事が、「涅槃經」に先行すると主張するつもりはない。